

井伊直弼に「開国」の歴史を捧げる。

阿部安成

はじめに

「直弼の復権」を1つの企図として、2007年に開催された彦根城築城400年祭の終幕が近づいたところで、彦根市は翌2008年に「日米修好通商条約150周年記念事業(仮称)」をおこなうと発表した。「直弼公を顕彰する」ことを目的に掲げたこの事業計画は、発表ののちそう時間をおかずに、「井伊直弼と開国150年祭」とその名称が確定した。1858年にアメリカを始めとする5か国と通商条約が締結されてから150年彦根市はこれを「開国」の150年ととらえると宣言したのだった。

本稿は、その郷里でいままお「開国を英断」した「開国の英雄」(金亀公園直弼銅像まえ説明板、2008年2月14日確認)として讃えられている井伊直弼が、どういった歴史のなかにおかれて評価されてきたのか、史料を提示しつつ、また史料をいくらかでも論稿上に留め残しながら、直弼をめぐるその歴史の生成と組成をとらえる試みである¹⁾。ここでの考察は、その対象をおもに1950年代以降の事象におくこととする。

開国の日本史

わたしたちの過去の知識の量と質、歴史をみるその見方と当否は、どのように作りだされているのか。そこにおける学校教育と教材としての教科書の役割を無視することはできないだろう。さまざまな「教科書問題」が起こってきたことであらわれているとおり、教科書はいくつもの課題を抱えてはいる。わたしたちが共有する歴史の一斑を提供する素材として、かつ、さまざまに問われるものとして教科書をとらえ、歴史教科書のなかで、開国という出来事がどのように書かれているのかをみるとしよう。ここでは、開国とはどういった事態を指しているのか、開国にかかわって記される人物はだれか、これらが教科書にどのように書かれているのかを確かめることとする。

「開国」は高校日本史の教科書に必ず出てくる、歴史学習における必須の歴史用語である。編別構成をみると、多くの教科書で近代、あるいは近現代の編の始まりの章は、近代国家の形成や成立が主題となっている。そうしたなかでいくつかの教科書には、「開国と明治維新」「開国と幕府の滅亡」の章題がつけられている(清水書院、山川出版社、日本書籍)²⁾。さらに章のなかの節となると、「開国」の語が頻出し、節のなかの見出しとして「日本の開国」と立てられるばあいもある(三省堂、実教出版)まず、第3編「近代日本の成立と発展」の第1章を「開国と明治維新」と題した清水書院の教科書のみよう³⁾。この第1章

¹⁾本稿は2008年度陵水学術後援会学術調査・研究助成を受けた研究題目「「開国」の顕彰をめぐる文化研究」の成果の一部であり、2008年に予定されている、6月28日開催「3大学リレー公開講座～「開国」その時代～」、8月1日開催「滋賀県教育委員会連携連続講座：滋賀大学で学ぶ意味 - 国際的視野の獲得」の講演内容とも重なる。またわたしが「故井伊直弼を考課する。 - 直弼五十回忌までの歴史批評」(『彦根論叢』第371号、2008年3月)で予告した開国と開港をめぐる議論の1つの披瀝でもある。

²⁾高校日本史教科書で「開国」という事項がどのような編別構成のなかにおかれているかは、表「高校日本史教科書「開国」掲載箇所一覧」を参照。なおここでは最新版ではないが、ひとまず2001年、2002年発行の教科書をテキストとした。

³⁾黛弘道ほか『新日本史A 改訂版』(清水書院、2002年)。

の最初の節が「1 開国とその影響」となり、その最初の見出しが「ペリー来航と開国」と立てられ、章題にみあって「開国」の語が多用されている。本文の書き出しは、

1853年6月、江戸湾入口の浦賀に来航したアメリカ東インド艦隊司令長官ペリーは、江戸幕府に大統領の親書の受理と開国を強くもとめた。老中阿部正弘は、やむなく親書を受け取り、翌年春の回答を約束した。と書かれる。つぎの見出しが「ペリー来航と開国」のその後となる「開港の影響」で、そのつぎの「安政の大獄」の見出しの元で本文は、

ペリーの開国要求を受けた老中阿部正弘は、これまでの慣例を破って朝廷に報告するとともに、諸大名や幕臣にまでその意見をもとめた。

と始まる。「1 開国とその影響」と題された節の本文では、「開国」の語の使用は、この2回にもう1つをくわえた3回となる。「開国」は、アメリカ東インド艦隊司令長官ペリーが江戸幕府にもとめ、それを幕府の老中阿部正弘が受けたことがらとなり、したがって、「開国」とは、1854年に再来したペリーの「軍事的圧力に屈した幕府」が締結した日米和親条約（神奈川条約）による、

(1)下田・箱館の開港と下田への領事駐在、(2)漂流民の救助、(3)薪水・食料・石炭などの供給、(4)片務的最恵国待遇の供与などを認めた。

こと、べつに簡潔に言えば、「その後、幕府はイギリス・ロシア・オランダとも同様の条約を結んだので」、「ここに200年以上つづいた鎖国体制は崩れた」ことと、読み取る、あるいは教えられ学習することとなる。この条約による開港は、下田と箱館の2港である。横浜はまだ開港場とはならない。

他方で、直弼はこの章にどのように登場するのか。日米和親条約締結後の展開を、この教科書にしたがって順にたどると、アメリカ総領事ハリスの下田到着、堀田正睦などの幕閣に通商条約締結の要求、直弼大老就任、そして直弼が、

勅許を待たずに日米修好通商条約に調印し、(1)神奈川・長崎・新潟・兵庫の開港と江戸・大坂の開市、(2)自由貿易、(3)関税率の協定、(4)日本における領事裁判権（治外法権）の承認などを認めた。

と記される。ついで、「安政の大獄」の見出しのもとで、さきにもた老中阿部の所為により、「朝廷の権威を高め、幕政轉換のきっかけとなった」そのころに、將軍継嗣問題にかかわり「幕政上の対立が激化し、修好通商条約調印直後に直弼は、

紀伊藩主徳川慶福を14代將軍家茂とし、対立する反対派の人びとを大量に処罰した（安政の大獄）。このため、井伊大老は1860年3月、江戸城の桜田門外で水戸の浪士たちに暗殺された（桜田門外の変）。

との展開が示される。直弼がおこなったことは、修好通商条約（安政の五か国条約）の調印と、同時期に將軍継嗣をめぐる反対派の大量処罰を執行したことであり、それにより暗殺された、とこの教科書では記されたのである。ここでは、安政の大獄と桜田門外の変が、直結している。

この教科書の第1章「開国と明治維新」の始まりのページには、3つの図版がある。「江戸湾の防備」を示した地図を、左のペリー提督の肖像画と右の彦根藩主井伊直弼の肖像画⁴⁾が挟む構図である。ぼんやり

⁴⁾以下でもみるとおり、本稿でテキストとした教科書に掲載された直弼の肖像画はすべてこの豪徳寺蔵のそれである。この肖像画は直弼の四男直安が描いた油絵である（彦根城博物館編『井伊家歴代の肖像』彦根城博物館、2003年）。なお、坂本賞三ほか『高等学校 改訂版 新日本史B』（第一学習社、2002年）の直弼肖像画は左右が反転している。

第1編「近・現代の日本と世界」	第1章「近代国家の成立と東アジア」	「国際環境の変化と江戸幕府の滅亡」	開国、開港と安政の大獄、貿易の開始とその影響、尊王攘夷運動の激化、征長の役とさらなる外圧、薩長連合の成立、江戸幕府の滅亡	宮地正人ほか『新日本史A』桐原書店、2002年
「近代・現代」	第9章「近代国家の成立と東アジア」	「江戸幕府の滅亡」	列強のアジア侵略、開国、通商条約の締結、安政の大獄、貿易の開始とその影響、西洋技術の摂取、公武合体運動、尊王攘夷運動の激化、征長の役、薩長同盟の成立、列国の対日政策、江戸幕府の滅亡	宮地正人ほか『高等学校 新日本史B 改訂版』桐原書店、2002年
「近代・現代」	第9章「近代国家の成立と東アジア」	「江戸幕府の滅亡」	列強のアジア侵略、開国、通商条約の締結、安政の大獄、貿易の開始とその影響、西洋技術の摂取、公武合体運動、尊王攘夷運動の激化、征長の役、薩長連合の成立、列国の対日政策、江戸幕府の滅亡	宮地正人ほか『日本史B ワイド 日本の歴史 改訂版』桐原書店、2002年
第4編「近代・現代」	第10章「開国と幕末の政局」	「開国」	アヘン戦争の衝撃、ペリーの来航、将軍継嗣問題、通商条約の締結と安政の大獄、公武合体政略、開国の影響	朝比奈正幸ほか『高等学校 最新日本史 日本史B』国書刊行会、2001年
第2部「近現代」	第1章「激動のアジアと近代日本の歩み」	1-3「開国から倒幕へ」	天保の改革と雄藩の登場、激動のアジア、開国と貿易の開始、尊王攘夷運動から討幕運動へ	青木美智男『明解 日本史A 改訂版』三省堂、2002年
第 編「近代の社会と文化」	第2章「明治維新と近代国家の形成」	「激動するアジアと日本の開国」	激動するアジア、開国前夜の政局、日本の開国、日米修好通商条約の締結、貿易の開始、西洋技術の摂取	青木美智男ほか『詳解 日本史B』三省堂、2002年
第4編「近代国家の成立と近代文化の展開」	第9章「明治維新と近代西洋文化の摂取」	「開国と幕藩体制の解体」	激動するアジアの動き、日本の開国、通商条約の締結と政争の激化、欧米貿易の開始とその影響、幕末における西洋文化の摂取、日本美術の西洋美術への影響、反幕府勢力の増大、徳川幕府の終末	家永三郎ほか『新日本史 B』三省堂、2002年
「近代・現代」	第4章「大日本帝国の誕生」	「黒船は幕藩体制をどうゆるがしたのか」	日本の開国、安政の大獄	宮原武夫ほか『高校日本史A』実教出版、2002年
「近代・現代」	第9章「明治維新と近代文化の導入」	「欧米のアジア侵略と日本の開国」	欧米諸国のアジア侵略、日本の開国、安政の政局、貿易の開始、公武合体と尊王攘夷、尊攘運動の激化と挫折	直木孝次郎ほか『日本史B 新訂版』実教出版、2002年
「近代・現代」	第7章「大日本帝国の誕生」	「黒船は幕藩体制をどうゆるがしたのか」	日本の開国、安政の大獄	宮原武夫ほか『高校日本史B 新訂版』実教出版、2002年
第3編「近代日本の成立と発展」	第1章「開国と明治維新」	「開国とその影響」	ペリー来航と開国、開港の影響、安政の大獄	黛弘道ほか『新日本史A 改訂版』清水書院、2002年
第4編「近代・現代」	第1章「近代国家の成立」	「開国と江戸幕府の滅亡」	開国前夜、開国と幕政の推移、開国とその影響、西洋文明への接近、公武合体と尊王攘夷、討幕運動の展開、大政奉還、幕末の社会と文化	黛弘道ほか『詳解 日本史B 改訂版』清水書院、2002年
第4編「近・現代」	第1章「開国と明治維新」	「開国とその影響」	ペリー来航と開国、開港の影響、安政の大獄	村井章介ほか『要解 日本史B』清水書院、2002年
第4編「近代」	第1章「開国から立憲体制の成立へ」	「開国と江戸幕府の滅亡」	列強の進出とアジア、ペリーの来航、通商条約、開港の影響、幕末の動乱	福田豊彦ほか『高等学校 改訂版 精選日本史B』第一学習社、2002年
	第5章「近代日本の形成とアジア」	1「欧米文化の導入と明治維新」 「幕府の衰亡と国際環境」	外圧の激化、開国と幕府の対応、開国とその影響、尊王攘夷と公武合体、攘夷から倒幕へ、幕府の滅亡	坂本賞三ほか『高等学校 改訂版 新日本史B』第一学習社、2002年
第1部「近・現代」	第1章「欧米のアジア侵略と明治維新」	2「開国と倒幕」 「ペリー来航と条約調印」	アメリカの開国要求、「黒船」渡来、日米通商条約の調印	田中彰ほか『日本史A 現代からの歴史』東京書籍、2002年
	第4章「近代国家の形成と国民文化の発展」	1「開国と明治維新」 「開国」	列強の東アジア進出、ペリーの来航、通商条約の調印、貿易の開始とその影響、幕府の内部対立	尾藤正英ほか『日本史B』東京書籍、2002年
	第4章「近代国家の形成と国民文化の発展」	1「開国と明治維新」 「開国」	列強のアジア侵略、ペリーの来航、通商条約の調印、幕府の内部対立、貿易の開始とその影響	尾藤正英ほか『新選 日本史B』東京書籍、2001年
第4編「近代」	第13章「開国と幕府の滅亡」	「開国と不平等条約」	圧迫さえるアジア、ペリーの来航と和親条約、安政の五か国条約、安政の大獄、貿易と経済変動、西洋技術の導入	中村政則ほか『新版 高校 日本史B』日本書籍、2001年
第 部「近代・現代の日本と世界」	第5章「開国と明治維新」	「アジアの激動と日本の開国」	アヘン戦争、ペリー来航、開国、開国の影響	石井進ほか『日本史A』山川出版社、2002年
第4「近代・現代」	第9章「近代国家の成立」	「開国と幕末の動乱」	開国、開港とその影響、政局の転換、公武合体と尊攘運動、討幕運動の展開、幕府の滅亡	石井進ほか『新日本史 改訂版』山川出版社、2001年
第4部「近代・現代」	第9章「近代国家の成立」	「開国と幕末の動乱」	開国、開港とその影響、政局の転換、公武合体と尊攘運動、討幕運動の展開、幕府の滅亡、幕末の文化	石井進ほか『詳説 日本史B』山川出版社、2002年
第4部「近代・現代」	第11章「近代国家の成立」	「黒船来たる」	ペリー来航、開国、通商の取りきめ、国内経済の混乱	児玉幸多ほか『日本の歴史』山川出版社、2002年
第2部「近代・現代の日本社会」	第1章「明治維新と欧米文化の導入」	「開国」	国際環境の変化と開国、開国の影響	鳥海靖ほか『現代の日本史 改訂版』山川出版社、2002年
第4部「近代・現代」	第9章「近代国家の成立」	「開国と幕府の滅亡」	開国、開国の影響、尊攘運動、討幕運動	石井進ほか『高校日本史 改訂版』山川出版社、2002年

とした生徒だったら、この図版をみてペリーと直弼が「開国」をめぐる交渉をしたと覚えてしまうかもしれないが、教科書本文にしたがった授業で教師の教えをきちんと学ぶ生徒は、「開国」とは日米和親条約にもとづく鎖国の解除であり、それはペリーと阿部の交渉をとおして実現した歴史を劃する出来事だと知ることとなる。

なお、ここに付言すれば、直弼とペリーとを組みあわせた図像は、1909年の横浜開港五十年祭のときにしばしばみられた、記念絵葉書や冊子の挿絵に用いられた構図で、フィクションではあれそれは、確かな現実としてすでにあったのだ⁵⁾。

「開国」を、いっそうはっきりと記すとどのようになるか。たとえば

1854(安政元)年、ペリーは7隻の軍艦をひきいて再度来航して圧力をかけたため、幕府は日米和親条約(神奈川条約)をむすんで、下田・箱館をひらき開国におうじた。

というように、「開国」とは下田と箱館に港を開いたことだと、限定した解釈ができてしまう簡潔な記述の教科書もある⁶⁾。その一方で、オランダ国王が「開国を勧告」したこと、ペリーが「日本に開国と貿易を要求するフィルモア大統領の国書を受け取るよう強くせまった」ことを記しながらも、その「開国」とはなにを指しているのかが不明瞭な教科書もある⁷⁾。前出のオランダ国王の勧告を拒否したことについて、幕府は「鎖国を守ろうとした」と書くのだから、ここでは文字どおり「開国」とは、鎖されていた国を開くこととなるのだろう。

もう1つ、「開国」の見出しを立てた教科書をみよう⁸⁾。それは、第部「近代・現代の日本と世界」第5章「開国と明治維新」「アジアの激変と日本の開国」の構成となっている。オランダ国王による開国勧告を経て、「アヘン戦争の直後から、欧米諸国は日本に開国を求める動きを強めてきた」ことが記され、浦賀にあらわれたペリーが「国書を提出して日本の開国を求め」た、と記述が展開する。それへの老中阿部の措置を示したあとで、

幕府では、前水戸藩主徳川斉昭を幕府に参与させ、越前藩主松平慶永・薩摩藩主島津斉彬・宇和島藩主伊達宗城らの協力を得て、幕臣から永井尚志・岩瀬忠震・川路聖謨らを登用して対外交渉にあたらせた。

と、ペリー来航後の対外問題に対処した人物を列挙し、そして通商条約締結をもとめるハリスとの交渉を担った老中首座堀田正睦の名をあげ、ついで「堀田の後を受けた大老井伊直弼は勅許が得られないまま、同(安政5年)6月、日米修好通商条約に調印」した、となる。この条約により、

(1)神奈川・長崎・新潟・兵庫の開港と江戸・大坂の開市、(2)通商は自由貿易とする、(3)開港場に居留地を設け、一般外国人の国内旅行を禁じる、〔中略 引用者による。以下同〕(4)居留地内での領事裁判権を認め〔中略〕(5)関税についても日本に税率の決定権がなく、相互で協定して決める

こととなった、というこの教科書では、日米和親条約締結は「開国」の1つまえの見出し「ペリー来航」のもとに書かれている。ここでの「開国」とは、直截には、ペリー来航による日米和親条約締結を指すの

⁵⁾阿部安成ほか編『記憶のかたち - コメモレイションの文化史』(柏書房、1999年)を参照。

⁶⁾青木美智男ほか『明解 日本史A 改訂版』(三省堂、2002年)。

⁷⁾中村政則ほか『新版 高校 日本史B』(日本書籍、2001年)。ここでは第4編「近代」第13章「開国と幕府の滅亡」(章の数字は通し番号)「開国と不平等条約」の本文は表に示したとおり6つの見出しがあり、そこに「開国」の語はみえない。

⁸⁾石井進ほか『日本史A』(山川出版社、2002年)。

ではなく、ハリスの交渉により実現した日米修好通商条約に始まると読める稀有な記述となっている。教科書執筆者は、日米修好通商条約の調印者として直弼の名をあげ、それとともに、対外交渉にあたった幕臣や彼らをささえた藩主と前藩主の名を複数あげている。そのなかには、岩瀬忠震もみえる。「開国」は複数の人びとの尽力により実現したとあらわしているのである。

前出の、「開国」について対照の記述をおこなっていた教科書での直弼もみよう。一方の「開国」を下田と箱館を開いたことと記した教科書（前掲青木ほか『明解 日本史A 改訂版』）では、その記述場所である「開国と貿易の開始」の見出しに始まる本文では、登場人物はペリーとハリスの2名だけだった。直弼は、そのつぎの「尊王攘夷運動から討幕運動へ」の見出し本文の冒頭に、「この間、外交にあたったのは老中の阿部正弘と大老の井伊直弼だった」と登場する。つづく記述は、つぎのとおり。

正弘は、ペリー来航のさい、朝廷や大名らに意見をもとめた。しかしこれが、朝廷の権威をたかめるとともに、有力大名らが幕政に介入するきっかけとなった。そのため、通商条約の締結にあたって、攘夷意識の強い天皇から許しがえられず、幕府は窮地におちいったが、その後、直弼は、許しをえないまま条約に調印した。

ここでは、ていねいに読めば、ペリー - 日米和親条約 - 阿部正弘、ハリス - 日米修好通商条約 - 井伊直弼とのつながりがわかるが、それぞれの結びつきが1つの見出しのもとに書かれてはいないので、ぼんやりと読んでいくとわかりづらくなる記述といえよう。そして直弼をめぐるのは、

条約の調印に反対した大名や公家、武士らの弾圧をはかった（安政の大獄）、/だが、1860（万延元）年、直弼が水戸藩士らによって暗殺される（桜田門外の変）や、朝廷のもとで鎖国を維持しようとする尊王攘夷運動がいきよにもりあがった。

と書かれる。安政の大獄と桜田門外の変は、ここでは順接ではなく逆接でつながられている（後述）。

もう1つの「開国」について不明瞭だった教科書（前掲中村ほか『新版 高校 日本史B』）では、日米和親条約をめぐるペリーがだれと交渉したのかは記されていない（「幕府は」とあるだけ。「ペリーの来航と和親条約」の見出し）。ついで、日米修好通商条約については、

幕府は井伊直弼が大老となった1858（安政5）年、海防掛目付の岩瀬忠震が中心となり、反対論をおしきって、日米修好通商条約に調印した。

との記述を素直に読めば、この条約の調印代表者は忠震となる（「安政の五ヶ国条約」の見出し）。つぎの見出し「安政の大獄」は、老中阿部がペリーの「開国要求」に対処したこと、老中堀田が勅許を得られなかったこと、そしてこのときもちあがっていた將軍継嗣問題が示され、直弼たち南紀派の画策が実現し、直弼の大老就任、「勅許をえられぬままに通商条約に調印」、そして、「反対派」として処罰された人びとの名が列挙され、この処罰は「安政の大獄」という名称だと教えられる。ここにいう「反対」は、將軍継嗣をめぐる条約調印についてととれる記し方である。この教科書ではつぎの節「2 尊王攘夷と倒幕」冒頭の見出し「尊王攘夷と公武合体」の本文で、「条約に調印し、安政の大獄を引きおこした井伊直弼に対する尊王攘夷派の反発が高まり、1860（万延元）年、水戸藩などの浪士（脱藩士）が、登城する井伊を待ちぶせして殺害した（桜田門外の変）」と記される。安政の大獄と桜田門外の変の記述が接してはいないが、この2つは因果の関係にあるとわかる。附言すれば、ここでは条約調印者として直弼を明記している。

ここで、高校日本史教科書のなかにある、岩瀬忠震についての記述をみておこう。すでに、示した2

つの教科書（前掲石井ほか『日本史 A』と前掲中村ほか『新版 高校 日本史 B』）以外には、やはり石井ほかの執筆で山川出版社による『詳説 日本史 改訂版』（2002年）で、脚注にさきの『日本史 A』とほぼ同文で、幕臣から忠震たちを登用して「対外交渉にあたらせた」とみえる。朝比奈正幸ほか『高等学校 最新日本史』（国書刊行会、2002年）は、第4編「近代・現代」第12章「立憲国家の成立」で、「【主題学習】条約改正の動き」のページを設け、そこで19世紀中葉にまで溯り、

日米修好通商条約の締結にあたり、米国総領事ハリスと条約草案の検討、談判をおこなったのは、幕府随一の外国通といわれた井上清直と岩瀬忠震であった。岩瀬は開国論者で、世界に通じる道義を主張し、慎重に草案の検討にあたった。

と記している。だがそれほどの忠震であっても、「長くつづいた鎖国のため、かれらの国際法・条約の知識には欠けるところがあり、この条約の不平等条項に気づかなかつた」これが条約改正問題の根元として示されているのである。

条約草案の検討を含む条約締結交渉担当者のひとり忠震は、「幕府随一の外国通」「開国論者」で、草案の検討や交渉では「世界に通じる道義を主張」し、そして、彼が「中心となり、反対論をおしきって、日米修好通商条約に調印した」と、歴史教科書で忠震があらわされたのだった。さて、もし、大学入試センター試験で、日米修好通商条約に調印した日本人はだれか？、という問題が出たとき、その解答は、直弼、忠震、どちらともいえる、どちらともいえない、のどれになるのだろうか。

「日本の開国」の見出しを立てた教科書は、その本文を第7章「大日本帝国の誕生」の冒頭においている⁹⁾。節題は、「黒船は幕藩体制をどうゆるがしたのか - 外圧下の社会と政治」である。まず、

江戸湾の浦賀沖にペリーのひきいるアメリカ艦隊が出現し、武力を背景に日本に開国をせまった。西部開拓が太平洋岸に達したアメリカは、捕鯨船や中国航路の寄港地として、日本の開国を求めた。

と書かれる。ペリーが再来すると、

老中阿部正弘は開国を決意した。幕府は日米和親条約（神奈川条約）、ついでイギリス・ロシア・オランダとも同様の和親条約をむすび、下田・箱館の開港、領事の駐在、相手国に一方的に最恵国待遇を与えるなどの条件を認めた。

「開国」と老中阿部、下田と箱館と「開国」とを強く結びつける記述である。それにつぐ日米修好通商条約は、「大老井伊直弼の命令」で締結されたと書かれる。直弼はつぎの「安政の大獄」の見出しのもとで、

大老となった井伊直弼は、慶福を跡継ぎに決定し、勅許をえずに条約に調印した。こうして將軍継嗣問題と条約勅許問題がからみあい、朝廷・幕府・有力大名をめぐるはげしい政争がおこった。この間、有力大名の家臣や在野の志士らが活躍したが、井伊はこれら有力大名や志士らを弾圧してきびしく処罰した（安政の大獄）。幕府の政策に反対する勢力は、藩のわくをこえて、尊王攘夷派として活動しはじめた。1860（万延元年）、井伊は水戸の浪士らに殺された（桜田門外の変）

と、將軍継嗣問題 - 条約勅許問題 - 安政の大獄 - 桜田門外の変が一つながりの出来事として記される。

高校日本史教科書のなかで、直弼の最後の登場となる桜田門外の変とはなんだったのだろうか。その要

⁹⁾宮原武夫ほか『高校日本史 B 新訂版』（実教出版、2002年）。

因は直弼の執行した安政の大獄であり、さらにその要因には、將軍継嗣問題あるいは条約勅許問題があったと教科書に記されている。では、桜田門外ではなにが起こったのか。教科書にそれはどのようにあらわされているのか¹⁰⁾。

- 1 これ〔安政の大獄〕に憤激した水戸浪士らは、1860(万延元)年、直弼を江戸城桜田門外で暗殺した(桜田門外の変)〔下線は引用者による。以下同〕〔茨城県立図書館蔵の直弼襲撃絵図掲載〕1860年3月3日早朝、雪のなかを登城する大老井伊直弼の行列に、水戸浪士ら18名がおそいかかり、大老の首^{しるし}をうばった。白昼の大老横死は、幕府の権威を失墜させた。
- 2 この直弼の弾圧政策〔安政の大獄〕は、かえって尊王攘夷派(尊攘派)の志士たちの反感を強め、1860(万延元)年、彼は水戸浪士らによって江戸城桜田門外で暗殺された(桜田門外の変)。
- 3 に同じ。〔つぎは図版解説文〕1860年3月3日早朝、雪のなかを登城する大老井伊直弼の行列に、水戸浪士ら(18名)がおそいかかり、大老の首^{しるし}をうばった。白昼の大老横死は、幕府権力を失墜させた。
- 4 井伊のこのような強圧的な処置〔安政の大獄〕は朝野の有志の強い反発をまねき、反幕的な空気を強めた。万延元年(一八六〇)三月、桜田門外で井伊は水戸浪士らの一団によって暗殺され(桜田門外の変) 幕府の威信はますます失墜した。〔茨城県立図書館蔵『桜田門外変の図』蓮田市五郎執筆の絵図(に同じ)を掲載〕ふり積もる雪のなか、水戸浪士らは井伊直弼を襲撃した。
- 5 だが、1860(万延元)年、直弼が水戸藩士らによって暗殺される(桜田門外の変)や、朝廷のもとで鎖国を維持しようとする尊王攘夷運動がいきよにもりあがった。
- 6 1860(万延元)年、これ〔安政の大獄〕に憤慨した水戸浪士らは井伊直弼を暗殺した(桜田門外の変)〔茨城県立図書館蔵の直弼襲撃絵図(に同じ)掲載。解説文なし〕
- 7 直弼はその〔勅許を得ない条約調印と安政の大獄〕ために攘夷論者のうらみをかい、1860(万延元)年桜田門外で水戸の浪士などに暗殺された。このため、幕府独裁の道は挫折した。
- 8 1860(万延元)年、井伊は水戸の浪士らに殺された(桜田門外の変)。
- 9 これ〔安政の大獄〕に憤慨した水戸藩浪士らは、1860(万延元)年3月、井伊を桜田門外で暗殺し(桜田門外の変) 幕府の権威をくずしていった。
- 10 に同じ。
- 11 この〔安政の大獄〕ため、井伊大老は1860年3月、江戸城の桜田門外で水戸の浪士たちに暗殺された(桜田門外の変)〔豪徳寺蔵の直弼肖像画掲載〕
- 12 この弾圧〔安政の大獄〕は幕府独裁を復活させようとしたものだったが、これに憤激した水戸浪士らによって、1860(万延元)年3月、井伊は江戸城桜田門外で暗殺され(桜田門外の変) 幕府の権威は失墜した。〔豪徳寺蔵の直弼肖像画掲載〕
- 13 に同じ。
- 14 1860(万延元)年、井伊直弼が暗殺されると(桜田門外の変) 幕府の専制体制は動揺した。
- 15 この処置〔安政の大獄〕は志士たちの憤激をかい、1860(万延元)年に井伊直弼は水戸浪士らによって桜田門外で暗殺された(桜田門外の変)〔豪徳寺蔵の直弼肖像画と茨城県立図書館蔵の直弼襲撃絵図(に

¹⁰⁾前出の表「高校日本史教科書「開国」掲載箇所一覧」にあげた教科書の順に記す。掲載図版の解説文も引用した。

同じ)掲載)彦根藩主、大老。開国を主張し徳川斉昭と対立。安政の大獄を断行し、桜田門外で暗殺された。
/1860年3月3日、水戸浪士らは雪のなか、桜田門付近で井伊直弼を襲撃した。

16 その〔安政の大獄〕結果、1860(万延元)年井伊は、水戸浪士ら尊攘(尊王攘夷)派によって、登城の途中、桜田門外で暗殺された(桜田門外の変)。(豪徳寺蔵の直弼肖像画と茨城県立図書館蔵の直弼襲撃絵図(に同じ)掲載)大老が暗殺されたことは、幕府の権威を大きくそこなうことになった。

17 このような強圧的な処置〔安政の大獄〕に憤激した水戸藩などの浪士たちは、1860(万延元)年3月、江戸城の桜田門外で直弼を暗殺した(桜田門外の変)。この事件によって、幕府の権威は急速におとろえることとなった。

18 井伊直弼は、一橋派の公家・大名・幕臣や、橋本左内、吉田松陰ら多数を処罰した(安政の大獄)。しかし、強圧的な処置〔安政の大獄〕に憤激した水戸藩などの浪士たちは、1860(万延元)年3月、直弼を暗殺した(桜田門外の変)。この事件以後、幕府の専制的な政治はくずれはじめた。(豪徳寺蔵の直弼肖像画と常陽明治記念館蔵の直弼襲撃絵図掲載。所蔵元は違いますが絵はに似ている)

19 条約に調印し、安政の大獄を引きおこした井伊直弼に対する尊王攘夷派の反発が高まり、1860(万延元)年、水戸藩などの浪士(脱藩士)が、登城する井伊を待ちぶせして殺害した(桜田門外の変)。(茨城県立歴史館蔵の直弼襲撃絵図掲載)井伊が殺害された原因は、勅許を待たずに日米修好通商条約に調印したことや安政の大獄をおこしたことにあった。

20 幕府の厳しい弾圧に憤激した水戸脱藩の志士たちは、1860(万延元)年、井伊を桜田門外で暗殺し(桜田門外の変)。これをきっかけに幕府の独裁は崩れ始めた。(茨城県立図書館蔵の直弼襲撃絵図(に同じ)掲載)1860(万延元)年3月3日、水戸浪士17名と薩摩藩士1名とが、大雪のなかで登城する井伊直弼を桜田門外に襲った。直弼が駕籠の外に引き出され、首を討たれようとしている。

21 このきびしい弾圧〔安政の大獄〕に憤激した水戸脱藩の志士たちは、1860(万延元)年、井伊を暗殺し(桜田門外の変)。その結果、幕府の独裁はくずれはじめた。

22 このきびしい弾圧〔安政の大獄〕に憤激した水戸脱藩の志士たちは、1860(万延元)年、井伊を桜田門外で暗殺し(桜田門外の変)。その結果、幕府の独裁はくずれはじめた。

23 幕府のこのような強硬な方針〔安政の大獄〕は、反対派の憤激をかきたて、1860(万延元)年、井伊直弼は江戸城へ登城の途中、桜田門の近くで水戸浪士たちに暗殺された(桜田門外の変)。この事件は、幕府の専制的な政治に大きな打撃をあたえた。(茨城県立図書館蔵の直弼襲撃絵図(に同じ)掲載)1860(万延元)年3月3日、水戸浪士17名と薩摩藩士1名とが、大雪のなかを登城する井伊直弼を桜田門外におそった。直弼が駕籠の外に引きだされ、首を討たれようとしている。

24 各国との修好通商条約の締結は、長く続いた鎖国をはっきりとやめることを意味した。このため、朝廷をはじめとして、国内から強い反対の声があがり、大老井伊直弼は反対派の公家・大名・武士たちを数多く処罰した(安政の大獄)。しかし1860(万延元)年、井伊はこれに反発したもと水戸藩士らによって江戸城の桜田門外で殺され、これをきっかけに武士や志士のあいだに朝廷をもちたてながら、西洋人を追い払おうとする動きが急速に広まった(尊王攘夷運動)。(豪徳寺蔵の直弼肖像画と茨城県立図書館蔵の直弼襲撃絵図(に同じ)掲載)1860(万延元)年3月3日、水戸脱藩士17名と薩摩脱藩士1名とが、大雪のなかを登城する井伊直弼を桜田門外におそった。

25 直弼はいわゆる安政の大獄を断行して反対派を多数処罰した。しかし弾圧には反発も強く、1860(万延元年)年、直弼は江戸城桜田門外で水戸脱藩士らにおそわれて死亡した(桜田門外の変)。こうして幕府の独裁体制はくずれはじめた。〔茨城県立図書館蔵の直弼襲撃絵図(同) 掲載〕。1860(万延元年)年3月3日、水戸脱藩士17名と薩摩脱藩士1名とが、大雪のなかを登城する井伊直弼を桜田門外におそった。

ほとんどの教科書で水戸脱藩浪士たちの「憤激」「憤慨」や「反感」「反発」「うらみ」があらわされ、彼らが直弼を暗殺した、と浪士の立場からの桜田門外の出来事が記されるが、いくつかの教科書では直弼が暗殺された、と直弼の側からの記述がおこなわれ、そしてこれはまた、直弼に暗殺されるにふさわしい理由があったとも読める記し方だといえる。死亡した、とは一見したところ直弼の死を客観視する記述のようにも見えるが、おそわれて死亡した、というのだから、これもまた、暗殺された、と同様の記し方である。

結局のところ、暗殺の要因はといえば、ほとんどの高校日本史教科書で、直弼は、安政の大獄という弾圧のゆえに暗殺された、と記されているのである¹¹⁾。茨城県立図書館蔵の「〔桜田門外の変図〕」(蓮田市五郎画、[1860年]、1巻、34cm)を掲載する教科書はまるで、「直弼が駕籠の外に引きだされ、首を討たれようとしている」(前掲児玉ほか『日本の歴史』、前掲石井ほか『日本史A』)現場を再現するかのようにこの図版を使用しているとみえる。その場面の図版からの切り取り方はそれぞれに異なり、もっとも視点を引いているもの(前掲宮地ほか『日本史B ワイド 日本の歴史 改訂版』)と、もっとも接近した画面構成(前掲鳥海ほか『現代の日本史 改訂版』)とでは、現場の印象もずいぶん違ってみえる。図版に添えられた簡潔な短文の解説では、直弼が「開国を主張」したこと、「安政の大獄を断行し、桜田門外で暗殺された」ことが明確に記されている(前掲坂本ほか『高等学校 改訂版 新日本史B』)。暗殺された理由をあげながら、「首を討たれようとしている」=刀で首を切られようとしている場面を大写しにしてみせることによって得られる教育効果を、わたしは知らない。2つの教科書では、図版のキャプションに、「安政の大獄を断行し、桜田門外で暗殺された」(ここの図版は直弼の肖像画。前掲坂本ほか『高等学校 改訂版 新日本史B』)「井伊が殺害された原因は〔中略〕安政の大獄をおこしたことにあった」(ここの図版は茨城県立歴史館蔵襲撃絵図。前掲中村ほか『新版 高校 日本史B』)と、直弼暗殺の原因をきわめて明瞭に記している。

さきに1例をみたとおり、安政の大獄と桜田門外の変を逆接でつなく教科書が3社4点ある(前出 5、18、24、25、順に三省堂、東京書籍、あとの2つが山川出版社)。桜田門外の変が鎖国維持の尊王攘夷運動につながるのであれば、安政の大獄は「開国」推進の一事象となる(将軍継嗣については言及がない)。直弼は、安政の大獄と呼ばれる所為によって、よりいっそう、「開国」の実現後に展望した方向へ事態を進めようとしたのだが、しかし、それを阻む勢力により暗殺されてしまった、となるのだろうか。安政の大獄と桜田門外の変を逆接でつなく教科書はきわめて少数である。

11) こうした教科書記述をめぐる、大獄ではなく「小獄」として、教科書裁判を起そうと呼びかける怪気炎を聞いたことがある(2007年6月17日に彦根城博物館講堂で開催された「文化人井伊直弼と開国の偉人井伊大老」という論題の講演会)。小獄観は後述する『朝日新聞』滋賀版連載「井伊大老/開国百年祭に寄せて」(1960年10月12日)では小説『花の生涯』が出たところにもみられたという。大か小かはともかくも、「評定所の判決を受けた主な人物」だけでも69名があげられている(吉田常吉『安政の大獄』吉川弘文館、1991年。吉田は戦後になってようやく公開された井伊家に保存されてきた史料を東京大学史料編纂所編『大日本維新史料類纂之部 井伊家史料』東京大学出版会、1959年~1963年、として編纂し、それをふまえて直弼の伝記を執筆した研究者である)。

教科書をとおして日本史を学んでゆくものたちは、江戸時代のつぎに明治時代、べつにいうと近世のつぎに近代となると知ってゆく。そしてわたしたちの多くが、それを知っている。つぎにくるものや新しいものが必ずしもよいとはかぎらない。教科書をとおして日本の歴史を学ぶものが、「権威」「威信」「権力」が衰えた幕府を惜しむことはあり、なかにはそれへの愛惜を抱くものもいるだろう。だが、「独裁体制」「専制的な政治」を崩壊へと導くきっかけとなった暗殺事件があったとなれば、そうした体制をつくったり政治をおこなったりしてきた幕府は、時代の推移のなかで消えゆくものとして得心されてしまう。そのきっかけが直弼の死だった、と歴史教科書に載っているのだ。

1854年の和親条約締結=「開国」から1860年の直弼暗殺までは6年。高校日本史教科書では、このかんの記述は、長くて8ページ(前掲石井ほか『日本史A』)、短ければ2ページ(前掲黛ほか『新日本史A 改訂版』、前掲青木ほか『明解 日本史A 改訂版』)の分量となる。歴史教科書を離れてみてもおうおうにして、直弼は、この両端のどちらかで(といっても、「開国」和親条約締結のばあいもある)たとえば著作をあげると、島田三郎『開国始末 - 井伊掃部頭直弼伝』(輿論社、1888年)、戸田為次郎『開国元勳井伊大老実伝』(愛智堂、1892年)、中村勝麻呂『井伊大老と開国』(啓成社、1909年)、中村吉蔵『史劇 井伊大老の死』(天佑社、1920年)あらわされることとなる。

教科書の記述自体に籠もっている問題はなにか、教科書がどのように教材として用いられているのか、その内容はどのくらい理解されどれほど覚えられているのかはここで問わないとしても、教科書がわたしたちの過去の知識や歴史意識をつくりだしていると、おおまかにいうことは許されるだろう。そうした教科書をとおして、開国と直弼がどのように教えられるのか、理解されるのかそれは曖昧さをぬぐえない。「開国」とは鎖国を解いた状態であり、しかしまたそれは通商の始まりを含むばあいもある。1853年から1854年に始まる出来事なのか、あるいは1858年または1859年を重要な劃期とする事態なのか、教科書のなかの「開国」は、おおまかにいえば、前者に始まりとしての重点をしっかりとおきながら、その意義としては後者を欠かせないと臆気に記しつつ、それがなにであるかを簡潔には示していない、となる。

直弼もまた、彼の功績は通商のための開港場を認める通商条約締結時の大老だったことにもとめられるのか、あるいは大老在任時の業績としての「開国」が偉業と讃えられるのか、教科書を読むと両様の解釈が可能となる。さらに、教科書のなかの直弼は、読むものに2つの問いを提示していることとなる。1つは、安政の五か国条約調印は直弼のおこなったことなのか、いやそれは幕臣の岩瀬忠震たちの事績として評価すべきなのか。もう1つは、直弼は「開国」の偉人なのか、桜田門外で暗殺されるにみあう大弾圧をおこなった非道者なのか。まさに直弼は、彼ほどの「毀誉褒貶のはなはだしい人物は、国史上稀れであろう」といわれる歴史上の人物にほかならず¹²⁾、それは歴史教科書自体が教えるところでもあったのだ。

ここでもういちど、曖昧な歴史教科書を注意して読むとしよう。安政の大獄により惹起された、「直弼に対する尊王攘夷派の反発」(前掲中村ほか『新版 高校 日本史B』)が記され、さらに「朝廷のもとで鎖国を維持しようとする尊王攘夷運動がいきよにもりあがった」(前掲青木ほか『明解 日本史A 改訂版』)と教える教科書がある。將軍継嗣と条約調印をめぐる直弼と敵対する勢力が「尊王攘夷派」とひとくくり

¹²⁾ 吉田常吉『井伊直弼』(吉川弘文館、1963年、所収「はしがき」)この表現は溯れば、1960年の刊行物に「まえがき」として直弼の曾孫の直愛が書いていた(後述)

にされてしまい、その後に「挫折」したとはいえ彼らは、「鎖国」「攘夷」ではなく「開国」に転じ、討幕からついには維新へと大きく回転することとなる。これは、直弼の選択と、なにが、どれだけ違うのか、それは教科書では教えられていない。もとより維新を主動したもののたちのほとんどが、直弼とみずからを同じ位置にはおいていない。維新を遂行したもののたちの記録が歴史となった。それは「勝者」の歴史であり、「敗者」としての直弼は「毀誉褒貶があい半ばする」こととなってしまふ（前掲吉田『井伊直弼』）。

歴史研究者からそう指摘されたのちには、あるいはもっと溯って、直弼を知るもの、彼を調べて考察したものによる同様の指摘があったのちには、では直弼に毀誉のどちらを与えることがよいのか、が問われつづけることとなる。それはのちにみるように、直弼没後150年を迎えようとする現在においても、変わらない様相である。

複葉の百年祭

かつて「開国」をめぐって、その百年祭が各地で盛大におこなわれたことがあった。その場の1つである横浜では、直弼とは縁があるということで、彼の銅像が建てられたり歴史展示が催されたりして、開国百年を祝福することと直弼の顕彰とが重ねられる記念がおこなわれたのだった。ここでは、おもに横浜と彦根とで歴史の記念祭典と直弼の顕彰がどのようにおこなわれたのかをたどるとしよう。

(1) 1954年、横浜の開国百年祭

1. 祭典のあと 横浜では、1954年の4月5日から6月2日までのあいだ、開国百年を祝賀する祭典がおこなわれた。横浜市はこの百年をどのようにとらえ、その歴史を祝うなかでなにがあらわれたのかをみよう¹³⁾。

市の基本資料である『市政概要 1954年版』（横浜市総務局弘報統計課長篠原賢一編集責任、横浜市役所、1954年11月25日。横浜中央図書館蔵）を開こう。最初の章となる「1沿革」は、「開港前」「開港後」「開国百年祭」の3節に分かたれている。横浜開港についての記述にはまず、1854年の日米和親条約締結があり（前年のペリー来航はここでは書かれない）、しかしこの条約では「アメリカの望んだ貿易のとりきめができなかったので」、1856年から「ハリスはいろいろ努力」をしてそのすえに、1858年に日米修好通商条約が結ばれ、この条約で「横浜の開港は、翌年6月2日に定められた」と記されている。横浜開港は1859年のこととなる。その開港地も初めから横浜となっていたわけではなかった。条約文書には「神奈川」とあった開港場が横浜に変えられたのであり、開港場とするために、「横浜が良港であることを主張したひと」を捜し出さなくてはならず、「佐藤政養・佐久間象山・岩瀬忠震」がその人物だと、ここで説明されている。

『市政概要 1954年版』では、「開港前」はもとより、「開港後」と題された節にも、直弼の名はまったくみえない。

「開国百年祭」の節では、そこでの記述にふさわしく、なぜ1954年に横浜で開国百年祭を記念できるのか、この祭典の根拠を明示している。

¹³⁾ 開国百年祭の事業としておこなわれた二代目直弼銅像建立と記念歴史展については、阿部安成「二代目の肖像と履歴 - 1954年開国百年の横浜における井伊直弼の銅像」（『滋賀大学経済学部年報』第14巻、2007年11月）で論述した。本稿はその補論である。

昭和29年は、横浜村の海岸で、日米和親条約が結ばれてから、ちょうど満百年にあたる。/この記念すべき年をむかえて、横浜市は、神奈川県と横浜商工会議所との共催で、日米和親条約(神奈川条約)が結ばれた4月5日(旧暦3月3日)から開港記念日である6月2日にわたって、「開国百年祭」を催し、こぞって祝意を表すことになった。

というわけだ¹⁴⁾。『市政概要 1954年版』の「開国百年祭」の節はまた、横浜市によって現時からふりかえられた百年が、横浜にとっての重要な歴史として開陳される場ともなっている。この歴史記述には2つの仕掛けがある。

1つは、「開国百年の輝かしい足跡を称揚記念」(「あとがき」)し、横浜を「世界に通ずる道」と自認し、それとともに「開国百年横浜港の威容」(「写真」最初のページ)を讃える立場の設定である。現在に至る百年は、この地を世界の横浜として誇りうる歴史でもあった。この1954年はまた戦後9年のときでもあり、「本市が戦災による壊滅的な打撃と更に生命とする港湾施設及び中心市街地の接收等によつて、市勢発展が著しく阻害されている状態から、年一年と多くの困難を乗り越えて立上つてゆく横浜の姿」を中心としてこの概要を編んだと「はしがき」に書かなくてはならない戦後復興の時代となればなおのこと、港都横浜の威容をみせなければならなかったのだ。

そしてこの立場からは、開国と対置される「鎖国」は、ほぼ否認されてしまう。「17世紀のなかばに、徳川幕府が行った鎖国は、国内市場の形成をおくらせるとともに、西欧文明の吸収を二百年の間とざした」と、鎖国は歴史のなかの偉業として評価されることはない。では、開港まえの横浜は無価値だったのかというと、そうはならない。「開港前」の節では、「文書によってたどられる横浜の起源は西暦11世紀、すなわちいまから900年の昔までさかのぼることができる」と、その歴史の長さが言祝がれる。900年もの時間のなかで、「15世紀の1429年には神奈川は八丈島と交易をはじめめるほどにその繁栄ぶりをしめした」ことや、19世紀前期には「神奈川がそのころすでに人口の点で、城下町の小田原を200名も凌駕していたこと」が賀事として披露されるのである¹⁵⁾。もっともそれは横浜ではなく、神奈川であるが(もちろん神奈川も横浜市域だ)、横浜か神奈川かという峻別も開港のそのときからして曖昧だった。

もう1つは、開国と開港、1854年と1858-1859年の違いを曖昧にする書法の採用である。横浜で開国百年祭がおこなわれた1954年から百年まえは日米和親条約締結の年であって、それは交易のために開港場をおくことを決めた通商条約の締結ではない。そこで、横浜と開国と日米和親条約を結びつける工夫が必要となる。日本の開国となる日米和親条約、べつないい方では神奈川条約の締結は、その異称にあらわれているとおり、ここ横浜(=神奈川)で締結された、といえよのだが、そうは記されない。ではどうなるか。「1854年のこの和親条約は、通商の予備手段を講ずることによって、開国への第一歩をふみだしたことを意味する」、また、「1854年の和親条約と1858年の通商条約(安政5ヵ国条約)は、横浜開港をうながし、近代貿易商業都市横浜はこゝに誕生した」との解釈が示されたのである。両者は2つで1つの分かつがたい出来事であり、したがって、「開国」を、4年のあいだに展開した複数の出来事の一体とみる歴史意識が活用されたのだ。

¹⁴⁾なお日米和親条約調印の嘉永7年3月3日は暦を変えると1854年3月31日となる。3月3日がどのようにして4月5日と換算されたのか、その説明はない。

¹⁵⁾他方で横浜の「商業的農業の展開」や「漁業の近代化」の遅れも指摘されている。

現時から百年の時間を溯った時点にあった和親条約の締結は、それまでの「鎖国」を廃した「開国」という出来事として日本史の教科書にも記されてきた(前述)。それがおこなわれた場所は「横浜村の海岸」だった。日本史を劃する出来事の現場が横浜だった、では、日本史の記述に落とすことのできない出来事の当地として、そのときから現在までの百年を祝福しよう、となったのでは、ない。日本の近代化は、黒船来航を始まりとして述べられることがある。そうした「エキゾチックな黒船が象徴する近代日本の文明開化は、まさに、この横浜開港を契機としておこったのである」 そう、日本の開国とは、横浜の開港である、との歴史意識により、横浜での開国百年が祝賀されたのである。

この歴史意識は、開国百年祭のときに新たに創られたのではなかった。それは、1909年に溯り、横浜開港五十年祭の開催にさいして創出されたのだった¹⁶⁾。この歴史意識により、開国と開港の違いは、両者が重ねあわされることで曖昧にされ、「いま、日本開国百年をむかえて、波乱にとむ過去の歴史に目をむけその由来をたずねることは、ひとり横浜市民のみの関心事ではあるまい」と横浜における関心が、より広範な領域へと広げられてしまうのだった。開港というローカルな出来事を、開国というナショナルな事象へと審級させる横浜の歴史意識は、開港五十年祭から50年が経とうとするこのとき、なお、意味を持ち、活用されたのだ。

「開国百年祭」の節には、「開国百年祭行事」の一覧と、「日米和親条約の締結から横浜開港まで」の年表がつけられている。まず、後者からみよう。年表では、嘉永6(1853)年6月3日から安政6(1859)年6月2日までの時間が取りあげられ¹⁷⁾、前者は、「アメリカの使節ペリーのひきいる軍艦4隻が、浦賀沖に投錨し、幕府に国書の受領を要求した」とき、後者は、「横浜開港」の日付である。年表には副題となる、「開国から開港までのうごき」の文言が附記されているので、ここでは両者を峻別し、しかもそう短くはない年月がそのかんにあることあらわしている。年月日を明確に記す年表においては、「開国」はその最初に登場するペリー来航を指しているようにもみえるが、必ずしもはっきりしないままに、ともかくそれと横浜開港とは峻別されている。仮に1859年のところに「開国」と記してしまうと、1853年にも1854年にも「開港」と記入するわけにもいかず、そうかといって、なにか開いたことを記さずにはおけないということだ。

ハリスとの交渉では、安政4(1857)年12月11日の、「下田奉行井上清直・目付岩瀬忠震がハリスと会見し、日米通商条約についての会議を開き、同月25日草案が完成した」こと、安政5(1858)年6月19日に、「井上清直と岩瀬忠震が神奈川沖碇泊のアメリカ軍艦ポーハタン号におもむき、ハリスと「日米修好通商条約」(安政条約)に調印した」ことがあげられている。ハリス来航以降の年表に登場する人物は、くりかえし書かれた清直、忠震と、將軍家定の3名のみとなる。しかも、条約調印者として忠震たちがはっきりと書かれている。この年表には、佐久間象山も井伊直弼も出てこない。ここに登場した人物であれ、そうでないものであれ、彼らの役割がなにであり、それをどのように評価するのかは、年表には必ずしも明示されていない。もっとも、年表とはそうしたもののだろうが。この年表では、開港に至る展開を劃する

¹⁶⁾この横浜の歴史意識については、阿部安成「開港五十年祭と横浜の歴史編纂」(『一橋論叢』第117巻第2号、1997年2月)、同「横浜開港五十年祭の政治文化 - 都市祭典と歴史意識」(『歴史学研究』第699号、1997年7月)を参照。

¹⁷⁾引用箇所だけでなく史料原文にあわせて本文中で西暦と元号を併記することがある。

出来事に、年月日と人名とが明らかになるそれをあてはめていったのだった。紙幅の制限があるのかもしれないが、取りあげられた16の項目のなかに、直弼がかかわったと示された出来事は1つもなかった。「日米和親条約の締結から横浜開港まで」、すなわち「開国から開港までのうごき」を年表で記すとき、直弼抜きでもそれは可能ということだ。

他方で、この年表と見開きのページで読者にひと目でみえる「開国百年祭行事」に目を移そう。そこには、いずれもすでに終了した行事が列挙され、4月5日午前10時の「記念式典」、同日午後5時からの「記念パーティー」に始まり、「提灯行列」で終幕となる6月2日午後6時までの祭典の展開が、誌上で再現され、その概要が記録されていた。

祭典開幕の4月5日には、市内11箇所ですべて「史跡の顕彰」がおこなわれ、『絵入り横浜歴史年表』(原文表記のまま)も発行された。翌6日から11日までは市内の野沢屋で「生活文化百年祭展覧会」が、また、5月27日から6月3日までこんどは松屋で「記念歴史展」が開催された。そして祭典終幕となる6月2日には、午前10時に掃部山で「開港記念式典／井伊掃部頭銅像除幕式」が、中区海岸通では「神奈川条約締結記念碑除幕式」(時刻記載なし)がおこなわれた。さきの年表にはその名がなかった直弼は、この行事一覧のなかではただひとり人名が記された人物として登場している。直弼を「開国」の主役とする見方は、彼の郷里彦根の特権ではなかった。

こうした開国百年祭の記録は、すでに「開国百年祭」のリーフレットとして、和文2万部、英文6000部を発行し、「広く内外に宣伝紹介した」と、『市政概要 1954年版』に記されていた。このリーフレットとは、「開国百年」の題字がみえる、神奈川県、横浜市、横浜商工会議所による三つ折1枚ものの刊行物である¹⁸⁾。図版と文字からなるこの宣伝紹介のリーフレットは、前者は一曜斎国輝の横浜絵「横浜吉田橋通繁昌之図井本町通弁天通外国館遠景」と、「横浜村の応接所における日米両使節の接見」「横浜港崎町大門の風景(松林堂明治3年版)」の3葉、後者は、「開国百年祭について」(1954年4月)、「開国百年祭行事」、「日米和親条約の締結から横浜開港まで／(開国から開港までのうごき)」の3項である。文字であらわされた内容は、『市政概要 1954年版』のそれとほぼ同じ。祭典開幕にさきだって広く配布されたであろうリーフレットの内容が、祭典閉幕後の総括として刊行物に転用されたのである。祭典実施にあたって主催者たちは、「開国から開港までのうごき」に直弼の名を記さないが、しかし、開港記念式典と直弼銅像除幕式を開国百年祭の1つの行事としておこなうと予告していたのだった。

4月5日に配布されたという年表、『開国百年記念絵入り横浜歴史年表』(横浜市、横浜市教育委員会、1954年4月5日)もみよう¹⁹⁾。これも開けば1枚となる折りたたみのリーフレットで、そこには長い横浜の歴史が展開している。年表と反対の一面には、直弼の銅像とおもわれる建造物とその周囲に広がる公園を画面の手まえに広げ、その向こうに海とたくさんの船をみせている。これは、掃部山公園を見下ろし、そこから見渡せる横浜港を描いた図とあってよいだろう。だが、直弼銅像は明瞭には描かれていない。この年表は発行が4月5日付になっているから、まだ除幕式がおこなわれていない銅像への配慮ともみえる。この年表の5ページが、1854(安政1)年3月3日「日米和親条約(神奈川条約)がむすばれた」ことから、1859(安政6)年6月2日「横浜が開港された」ことまでを含む歴史となっている。

¹⁸⁾河合光栄家資料171-3(横浜市史資料室)。

¹⁹⁾河合光栄家資料171-4(横浜市史資料室)。

前者は、「横浜村海岸の応接場で、アメリカ代表ペリーと日本代表林大学頭のあいだでおこなわれた」出来事であり、「ことし(1954)は条約がむすばれて、100年にあたる」と、ここでも百年祭執行の根拠が、日米和親条約締結にある、と説かれている。この条約により「下田・箱館両港をひらく」などとなったものの、「アメリカのぞんだ貿易はできなかつた」というのだ。下田と箱館は貿易港ではない、となる。ペリーについてハリスが下田に来航する(1856年)、「彦根藩主井伊掃部頭直弼が大老になつた」(1858年)、「日米修好通商条約がむすばれた」(同前)、「横浜が開港された」(1859年)との展開が示され、修好通商条約締結と横浜開港が解説される。「神奈川沖のアメリカ軍艦ポーハタン号上で、アメリカ代表ハリスと日本代表井上信濃守清直と岩瀬肥後守忠震のあいだでおこなわれた」と条約締結の担当者がだれだったかが記され、「はじめ神奈川町が開港地に予定されたが、幕府はこれを横浜にかえた」という開港の経緯、それを進めようと「横浜が良港であることを主張した人々に、佐藤政養、佐久間象山、岩瀬忠震がいる」との功績者も列挙された。すでにみたとおり、横浜が良港になると主張した人びとの名を記すことと、そこに記された名は、前出のリーフレット『開国百年』や、『市政概要 1954年版』の「開国百年祭」の節の記述と同様である。

2. 祭典のまえ さて、市が自己を表現する公刊物である『市政概要 1954年版』の「あとがき」は、横浜村の海岸で日米和親条約(神奈川条約)が締結されてからの「満百年」という歴史を、「輝かしい足跡」として記念し、それを讃え、「百万市民満腔の慶賀のうちに華麗多彩な祭典をくり展げた」と総括した。ただし、「この祭典にさきがけて、本誌は開国百年記念特集号を刊行し、広く内外に横浜市政の大綱並びにその開国以来の発展の歴史を紹介」していたとも明かしたのだった。開国百年祭がおこなわれた1954年の年次を表紙に記した『市政概要 1954年版』は、「開国百年記念特集号」ではなかったのだ。

『市政概要 1953年版』(横浜市総務局弘報統計課長篠原賢一編集責任、横浜市役所、1954年3月25日。横浜市役所市民情報室蔵)を開こう。本書扉には、「開国百年記念特集号」と明記され、「はしがき」では、「特に本年は開国百年の意義ある年を記念して、市の各般諸事業の詳述のほか、統計篇として本市々政並びに市勢発展の趨勢を示す各種主要統計表をかかげ、附録篇をもうけて史蹟、横浜もののはじめ等を収録した」と紹介されている(この「はしがき」は1954年3月付)。ここでの「1.沿革」は「開港前」「開港後」との2つの構成となり、いまだ開催されていない開国百年祭については、当然のことまったく記されていない。だが本書では通例の概要書と違って、「1.沿革」から「2.自然環境」に移るあいだに、「横浜港御出発の皇太子殿下」という1ページが挿入されている。

これは

昭和28年6月2日ロンドンにおいて行われる英国皇帝の戴冠式に、天皇陛下の御名代として列席せられる皇太子殿下をお迎えする3月30日、横浜港は慶祝のよこび一色につつまれ、市内各沿道の御見送りの人波を縫って御着きになる殿下を迎えた。

どのような写真を写すかで伝える記録である。「開国百年記念特集号」と銘打たれた本書は、その扉のつぎのページに「横浜市徽章」とその由来が記され、そのつぎに市長や市会議長など5名の肖像写真がつづき、そのつぎには、1953年3月30日に渡欧する皇太子のようすを写した写真3葉を載せている。皇太子渡欧は開国百年祭とは無関係だ。だが、関係のない両者を『市政概要』のなかに混ぜ込む構成によって、少なくとも『市政概要』においては、よりいっそうのこと、「開国百年の意義ある年を記念」しようとしたとみ

える。皇室の活用法でもある²⁰⁾。1953年3月30日の皇太子来浜は年度末のことだったために、『市政概要 1952年版』には掲載しにくいだろうし、開国百年祭の記録集となる1954年版では遅すぎる。開国百年祭では高松宮の来浜があった。憶測すれば、皇太子と高松宮とをならべたときに、前者来浜を記録するために、『市政概要 1953年版』を開国百年記念特集号としたのではないか。『市政概要 1954年版』には、高松宮夫妻の写真を1枚だけでも載せなくてはならず、それは「開国百年祭記念式典(昭和29年4月5日 於旧フライヤー・ジム)」のキャプションがついて掲載されている。だが、それは登壇し挨拶を述べる横浜市長の後方に小さく写っているにすぎない。写真の小ささにあらわれているとおり、同書編集のなかでもその扱いは大きくはないのだ。

『市政概要 1953年版』につけられた開国百年記念の「附録」をみよう。まず、「史蹟」として古刹弘明寺から、金沢文庫や「開港当初の領事館」、旧横浜駅、山手外人墓地など、そして久保山墓地までがあげられ、「横浜もののはじめ」には、「外国商館のはじめ」「電信のはじめ」など41の事項が記されている。ただしこれらは、たんに「横浜において外人墓地のはじめである」ことなどが列挙されただけでなく、「わが国最初のものであった」(氷水屋)、「わが国和製石鹸のはじめ」、「邦人最初のものといわれる」(マッチ製造)というとおり、横浜初にして同時に日本初あるいは日本人で初めてのものやことがらがみせられたのである。本書では、なぜ開国百年記念号に「横浜もののはじめ」を載せるのかは、説明されていない。だがその理由は明瞭で、開港後の横浜に上陸した新しいものやことがらは、横浜から日本各地に広がっていった日本初のそれらだったのだ、という歴史意識のあらわれなのである²¹⁾。

この横浜と日本とを重ねあわせる歴史意識は、史跡にかかわっても表明されることとなる。さきの『市政概要』附録では、史蹟が開国百年をめぐってなにをあらわしているのかは説かれていなかった。では、『開国百年祭記念 横浜史跡のしるべ』(横浜市、1954年4月。横浜市史資料室蔵)をみよう。これはおそらく、『市政概要 1954年版』の「開国百年祭行事」にあがっていた、4月5日に市内11か所でおこなわれた「史跡の顕彰」において配布されたリーフレットだろう。ここには、「日米和親条約調印の地(中区海岸通)」を始めとした12箇所の解説が記され、その位置が地図に図示されている。いずれも、「黒船渡来」以降の出来事の場所や建造物の跡地で、「日本ではじめての鉄橋」があった「吉田橋関門跡」もある。冒頭におかれた「まえがき」では、「昭和二十九年四月五日は、横浜村の海岸で日米和親条約が結ばれて満百年にあたる」との開国百年にかかわる定型文が記されたうえで、

近代日本の誕生は、横浜開港を契機として起つたといつても、過言ではない。このたびの開国百年祭を機会に別記のように関係史跡を選定し、これを顕彰することとしたのも西洋文明移入に重要な役割をはたした往時の横浜の姿をここに回顧して先人の足跡をたどるとともに、戦後の復興にいそむ横浜市民の明日の歩みに大きな原動力を与えることを信じてのことである。

20) こうした横浜市でのいわば皇室の活用法は、1928年に開港記念日を6月2日とするさいに、その日は震災復興過程での「大横浜」建設記念日であり、それを視察に来た秩父宮の来浜記念日であり、幕末開港時の月日だと説明されたり、横浜市にとっての震災からの「甦生」となる復興記念日が天皇来浜日である4月23日とされたりしたことがあった(阿部安成「横浜の震災復興と歴史意識(1923~32年)」『日本史研究』第428号、1998年4月、を参照)

21) 「横浜もののはじめ」については、阿部安成「始原の歴史学を批評する - 想起される横浜の過去について」(『Quadrante』第3号、東京外国語大学海外事情研究所、2001年3月)を参照。

との解説がある。「まえがき」では横浜の歴史について3つのことが記されている。1つに、近代日本の誕生は横浜開港だと、日本の歴史と横浜での出来事を重ねあわせる記し方である。2つに、したがって開国百年記念の史跡は「西洋文明の移入」の地としての横浜を代表するものでなくてはならないとする、史跡選定の基準、そして3つに、とりわけ戦後復興を課題とする時期には、歴史をたどることが市民の「原動力」となる、とのいわば歴史の活用法である。当然そこでの歴史は、輝かしく誇るべきものとなる。

3. 祭典のさなか ここでは、開国百年祭がその同時期に、どのように報道されたのかを、各紙地方版においてみるとしよう。テキストとした新聞は、『朝日新聞』神奈川版、同神奈川版横浜川崎、『毎日新聞』神奈川版(6)、『読売新聞』神奈川読売(A)、同神奈川読売の3紙5版である(いずれも横浜市史資料室蔵製本版。以下、紙名は地方版名を省略して、朝日、毎日、読売と、発行年月日は54.6.2と略記し、この項では年も省く)。

各紙それぞれにシリーズの特集記事を編んでいる。『朝日』は「生きている百年 / 開国記念祭に寄せて」全48回(4.5~6.3)²²⁾、『毎日』はまず「開港百年の先覚者 / 表彰される故人16氏」上中下(4.2、4.3、4.6)を組み、ついで「開国百年の変遷」風俗編全6回(4.6~4.11)政治編全12回(4.13~4.25)経済編全4回(4.27~5.2)を、『読売』は「舶来事始 / ハマ百年譜」全25回(3.26~4.24)とその続編「続舶来事始 / ハマ百年譜」全10回(5.20~6.1)を連載した。

『朝日』の連載「生きている百年」は初回に、「十九世紀後半に開国の窓を開いたこの街」と横浜を表現し、その終りとなる第46回~第48回(6.1~6.3)には3回の連続で、

フィナーレ近い百年祭にそろそろ幕にしたいと思う。しかし集った資料をもう一度整理すると、なお資料、記録として次の世代に残したい事柄が意外に多い。ヨコハマから始まった新しい文明開化の草分けはイコール日本の草分け。そしてまたわれわれの生活の中に生きている歴史でもある。

との観点から「ひと足先に“ドンタク” / 日曜、休日もトップ切る」などの「ヨコハマ草分け集」、べつに言えば前出の「横浜もののはじめ」を掲載しているし、また『読売』の「舶来事始」もその初回で(3.26)

安政元年(一八五四年)に横浜村海岸で神奈川条約が結ばれてから今年はずいぶん百年。これを記念する「開国百年祭」が横浜市内各所で四月五日から華々しく開かれる。横浜が実際に開港ときまつたのはその五年後、安政六年六月二日だが、人口四百の一漁村が今日のミナト・ヨコハマに発展する契機となつたのはこの神奈川条約で「文明開化」の波は横浜から日本国中に流れていつたといつても過言ではなからう。

ととらえ、『毎日』はというと連載記事には歴史のとらえ方をあらかず主張はないのだが、つぎのような横浜市長の発表した「メッセージ」を掲載している(4.3)これは『朝日』『読売』の紙面には載っていないので、『毎日』が強く賛同した内容とみてよいだろう。

顧みますと十七世紀半ばに徳川幕府の行った鎖国政策は二百年の久しきにわたってわが国の門戸をとざし、西欧文明の吸収を断り世界の大勢におくれをとったわけですが、安政元年横浜で締結された日米和親条約は通商のための予備手段であり、開国への一步を進め、ミナト横浜の飛躍的發展を運命づけた点において特筆すべき事件であり、ひきつづく安政五年の日米友好通商条約^(ママ)によって近代日本はそのとびらを世界に向けて開き、まさにこの横浜から文明開化の時流は朝のように当時の日本国内に流れ込んだのであります。 /

²²⁾第28回から「開国記念祭に寄せて」の見出しが消える。この連載をもとに『黒船から百年 - 横浜・舶来文化のあと』(朝日文化手帖39、朝日新聞横浜支局編、朝日新聞社、1954年)が刊行された。

いま開国以来百年の歩みをたどってみますと、わが横浜の発展の足どりはそのまま近代日本の文化形成になるのではないかと思います。二百余年にわたる鎖国のとびらを開いてより息をもつがぬ西欧文明の吸収は事の大小を問わず、すべてミナト横浜を通して行われたといっても過言ではないと思います。 / [中略] 戦後めざましい復興をめざす明日への力強い歩みの第一歩を改めて市民の皆様とともにふみ出していきたいと思

います。

これらをみると、3紙ともに、開国百年のときにさいして、「開国」と「開港」を同一視し、それとともに、横浜の出来事を日本の事跡として重ねあわせ、文明開化=近代日本の展開を横浜に始まるとする歴史意識を共有しているとわかる。『朝日』(4.5)が「きょうから開国百年祭 / 交歓と親善こめて」の見出しのもとで、「鎖国から開国へと日本の新しい運命が開かれてきょう五日で百年目。神奈川にとって歴史的な意義ある日だ」と簡潔に書いていたとあり、「開国」とは鎖国の停止あるいは解除を指し、そうなる横浜と「開国」という出来事とは、それを規定した日米和親条約の締結地としてつながることとなる。だが、すでにみたとおり、条約締結の場所というよりも、開港場としての横浜こそが「開国」を推進したり遂行したりしたとあらわされているのだ。

ただし、「開国」と「開港」の同一視が、混乱を生じさせたり、苦笑を誘ったりすることもある。4月5日の記念式典で、「地元の嶋村市会議長は、何を感^(マ)違^(マ)いしたか「開港百年」(注=開国百年、開港九十六年)とやって満場苦笑」となったと報じられている(『朝日』4.6)。地元選出の議員も、ついうっかりなのか、もともとよくわかっていなかったのか、公式の儀礼の場でこの失態なのだった。それは苦笑を誘う。

祭典初日の記念式典では、『毎日』が祭典開催まえからすでに「開港百年の先覚者 / 表彰される故人 16氏」(4.2、4.3、4.6)の題で連載していたとあり、「式典では開港創始の幕末時代から明治、大正、昭和にかけて横浜発展のために私財をささげ開港の礎となった各方面の故人十六氏を表彰する」こととなっていた。この「物故開港功労者浅野総一郎氏ほか十五氏の功績を顕彰」(『毎日』4.6)することは、『市政概要 1954年版』には記されていない行事である。またこの功労者には、直弼、象山、忠震、政養、ペリー、ハリスは選ばれていない。記念祭終了後の6月3日には、さらに「市の発展に功績があった物故歴代市長」など「62氏の遺族に感謝状」が贈られることとなるが(『毎日』6.3)、やはり、直弼たちの名はない。彼らは、「横浜発展のために私財をささげ開港の礎となった」という選定基準からはずれてしまい、「開港百年の先覚者」や「物故開港功労者」に選出されなかったのだろう。のちにみるとおり、開港百年のときとはようすが異なるのだ。

『朝日』(4.5)が「多彩な行事(4月5日 / 6月2日)」のなかで、「記念歴史展 5月25日~6月2日 松屋」と予告していたこの展示が、どのように報道されたのかをみよう。この展示は、『開国百年』(前掲)というリーフレットでも前記の日程での開催が告知されていた。『朝日』(5.15)が「開国ゆかりの三百点 / 27日からハマで記念歴史展」の見出しで伝えるところでは、この「開国百年記念歴史展」は5月27日から6月3日までのあいだ(会期が1日延びた)、松屋デパートで開催されることとなり、「ハマ開港の恩人井伊掃部頭直弼(彦根藩主でのち幕府の大老)や日米和親条約締結後ハマの海岸を警備した真田藩(長野県松代町)のゆかりのもの、開国と開港に関係の深い品々が東大資料編集室、早大図書館、国立博物館、県立金沢文庫、民間などから約三百点が出される」予定だという。しかも、

この中には世に有名な安政の大獄が尊王攘夷運動の弾圧ではなく、そのころの時代に芽ばえていた暴力革命

の弾圧だったことと^{〔ママ〕}を物語る長野主膳（井伊大老の家臣で彦根藩の学者）から大老あての手紙（安政六年四月二日と三日付の二通）が新史料として初めて世に出される。／人間としてこの井伊大老は茶道、能、和歌、陶器にこった趣味人で、勅許を待たずに開国の方針を決め世情騒然としたとき「青あざみ野中の清水ツララ（氷）いて、その心をくむ人ぞなき」とせつない心情をうたった自作の和歌短冊も出される。

となると、この展示は、「ハマ開港の恩人」である直弼をめぐって、1つには趣味人あるいは文化人としての相貌を造形すること、2つには安政の大獄の印象を修正することが企図されていたようにみえる。

さきの『朝日』と同日付の『読売』（5.15）も、「開国百年記念歴史展／出品資料の目録決まる」「アメリカ国書の翻訳本など／初公開の珍品含め300点」の見出しを掲げて、「この出品物の中にははじめて公開される資料も相当あり「開国百年祭」にふさわしい貴重な歴史展となることが予想され、各本面から注目されている」と読者を誘っている。記事はなお、詳細に展示内容を伝えて読者に展覧を呼びかける。「中でも珍しいのは、嘉永六年ペルリが浦賀奉行に手交したアメリカの^{〔ママ〕}函書の翻訳書」「彦根藩で研究制作した「海上大砲^{〔ママ〕}標準器」（オクタント）」「安政の大獄で処罰する志士のリストとなった“長野メモ”「秘中要記」などで、「幕末当時の尊王じょうい（攘夷）派を押切って開国を強行した直弼の居城彦根藩ではいかに当時の海外事情を研究したかが、これらの資料をみるとよくわかる」との展示工夫が示され、しかも、「アメリカとの通商に開港場として神奈川をやめて横浜に変えようと決定した幕府の会議草案（直弼のメモ）」もあるという。条約調印当初にはなかった横浜開港が実現したのも、直弼の成果だとみせる。

他方で、彦根や直弼以外の展示品としては、「神奈川条約締結の時、調印場の警備に当たっていた松代藩が使ったものである」「松代藩主真田家の「六文銭のまん（幔）幕」旗差しものなど」が松代町から提供される予定だ。

『朝日』（5.27）もようやく、「米国への国書草稿など／きょうから開国記念歴史展」の見出しで展示の詳細を報じ、そのなかの「興味深いもの」として、『読売』報道と同様に彦根藩関係の展示物をあげ、くわえて、「開国、安政の大獄の裏面史を語る書状多数」「その他桜田の変の時の犠牲者関係など、当時の世情を無言のうちに語っている」史料をあげている。

さて、この展示は、『開国百年記念歴史展目録』（筆者蔵）の「出品目録」によると、それは「井伊直弼」「開国関係」「佐久間象山」「開港と横浜」の4つに分けられていた。だが、「井伊直弼」108件、「佐久間象山」10件と、その出品数の偏りは著しい。新聞報道での紹介もそうであったように、この歴史展はまるで直弼展の様相なのである。この展示を撮影した写真のアルバムがある（横浜市史資料室蔵）。「Photo Album」の題字表紙がついたそれには、19葉の写真が掲載されている。おそらく入口附近の「開国百年記念歴史展」の大きな案内板の下に、「井伊家出品」として、井桁の旗、井伊の赤備えが展示されているようすを写した1枚、白馬に乗った象山の肖像画を写した1枚などがある。アルバム裏表紙見返しには、活字印刷で、「（開国百年祭）／開港九十六年みなと祭／井伊掃部頭銅像再建／記念」を記されている。この直弼銅像再建の記載にかかわっていえば、なによりこのアルバムは、表紙を開いた最初のページになんの説明もなく、表題のない文章を掲載していた。神奈川県、横浜市、横浜商工会議所の3者による1954年6月2日付で、

安政五年大老井伊掃部頭直弼は、内外の紛擾を排して、日米^{〔ママ〕}修交通商条約の調印を決行し、ひろく通商の基を開き、近代日本発展の端緒をつくつた。

と書き始められるこの文章は、この年に再建された直弼銅像の、台座裏面に嵌め込まれた銘板の碑文と同一なのだ（修好を修交とするところまで同じ）。これは、直弼の初代と二代めの銅像建立の経緯を記した銘文である。表紙だけみれば、なにも特徴のないこの写真帖ではあるが、これは、開国百年祭と開港96年記念みなと祭のなかで、1つにはとりわけ開国百年記念歴史展を記録し、そのなかでもとくに直弼にかかわる展示をみせ、2つにその直弼の銅像再建を解説する記念品だったのである。

銅像再建をとおして、「近代日本発展の端緒をつくつた」と評価された直弼は、新聞報道のなかではどのようなとらえられていたのか。前出の『毎日』紙上で連載された「開国百年の変遷」の政治編第2回(4.14)では、ペリー来航時には、「開港賛成者は堀田備中守と堀丹波守で、井伊掃部頭は態度を表明しなかった」（嘉永6年7月1日のこと。見出しは「礼砲響きペリリ上陸 / 諸藩の大勢開国に反対」）とその曖昧さが指摘され、同第8回「八十八卿開港に反対 / ハリス江戸城に入る」(4.21)では、安政4年12月30日のこととして、「幕府は親藩以下の諸大名を集めて開港貿易を諮問した。岩瀬肥後守忠震が幕府案を説明」と、議論の中心に忠震がいたとみせ、つぎの第9回「咸臨丸太平洋を横断 / 井伊大老遂に条約締結」(4.22)で、

井伊は条約締結も止むをえないと決意した。井伊は直ちに岩瀬肥後守と井上信濃守とを全権に任命して「勅許が下りるまでできるだけ調印を延すように」といった。岩瀬らは「万止むをえない場合にも調印はしないのですか」ときいた。井伊は「その際は仕方がない」と答えた。

と、ハリスとの交渉に向かうまえの忠震と清直に対する直弼の態度を淡々とあらわし、連載第10回(4.23)で、「井伊大老は条約文に書かれてある神奈川には反対であり横浜村を主張した」と記せば、やはり直弼が横浜開港の主唱者となるのである。直弼の意思が不鮮明だったり、忠震の役割が示されたりして、無暗と直弼を讃える記し方をしないなかで、ぎりぎりの局面で横浜開港を直弼が主張した、と書かれれば、横浜にとってその存在はいっそう大きく、顕章に値する人物と受け入れられることだろう。

連載「開国百年の変遷」を組み、直弼による横浜開港の主張を記した『毎日』は、他紙よりも多く銅像建立の展開を写真つきで報じていた。「井伊大老掃部山へ / 除幕式待つ丈余の銅像」(5.22) の見出しで、「掃部山に到着した井伊大老の銅像」の写真と記事、

井伊掃部頭銅像は二十二日横浜港を見下す掃部山のもとの場所へ運搬され据付けを待つばかりとなった。〔中略〕西区役所、市役所、県庁などヘトラックでお披露めしたのち掃部さまは懐かしのもとの場所へ到着した。一両日中に据付けられる。

お披露目として役所庁舎を廻るようすはご愛嬌か。「400貫の巨体据付け / 掃部山で古式豊かに挙式」(5.25) の見出しで、「つり上げられた井伊掃部頭銅像」の写真と記事、

戦後ハマの銅像復活第一号 開国百年記念井伊掃部頭銅像据付式は二十四日午後一時から掃部山公園で行われた。古式に則り式は神式で行われた〔中略〕神主のあげるオハライ、ノリト、太鼓を合図に十五、六人の石屋さん総掛りでもとの台石の上にみごとオサマツタ。

据付式が神式となると、銅像はご神体のようでもある。「雨に濡れた威容 / ビキ二雨知らずに掃部ぬれて立ち / 井伊大老の銅像除幕式」(6.3) の見出しで「雨にもめげず一般の参観者」の写真と記事、

直弼から三代の当主彦根市長直愛氏は目下渡米中とあって次弟の東京都目黒区緑ヶ丘二三二井伊直弘氏(四四)がかけつけ〔中略〕関係者約八百名が集った。除幕は神職の修祓の後、平沼市長の孫、精華小学校六年生明子さん(一一)の手でなされた。三十五尺の白い垂幕が切って落されると二丈三尺の台座の上に、

雨に濡れた一丈二尺の大老の威容が、衣冠束帯姿で現われた。眼下の横浜港を見下しているかのように..戦時中撤去されてから十年振りで元の台座におさまった。

直弼の曾孫が見守るなかで、銅像の除幕式は挙行された。直弼銅像の掃部山到着 つりあげ 除幕式、とその展開を写真つきで報道は、かなりゆっくりと回されたニュース・フィルムのようなものである。直弼銅像の竣工が、徐々に、読者に伝えられていった。

速報性ということであれば、『毎日』よりもさきに『読売』(5.18)が、「出来上がった掃部頭の銅像」の写真つきで「掃部頭の銅像完成 / 製作費総額四百万円」を報じ、さらに溯ると『読売』(4.4)は製作中の直弼銅像の写真を掲載していた。だが、直弼銅像の写真掲載が4月4日付から5月18日付と間遠になってしまっただけで、『読売』がその読者に与える直弼銅像製作経過の印象は弱くなる。開国百年祭終幕を伝える『読売』記事(6.3)に写真はなく、そのときにおこなわれた直弼銅像除幕式の光景は紙面に写し出されていない。5月22日付、5月25日付、6月3日付と連続するかのような『毎日』の写真掲載のほうが、直弼に関心のある読者を紙面に引きつける効果はあっただろう。写真掲載ということでは、開港96年みなと祭祝賀式といっしょに直弼の銅像除幕式もおこなわれる、と6月1日付で予告報道をした『朝日』も、「ハマ百年祭雨中に終幕」の見出し記事を掲げた『朝日』(6.3)紙面に載った写真は、直弼の銅像ではなく、「日米和親条約締結記念碑の除幕式」の光景だった。『毎日』の直弼銅像への関心の寄せ方は、他を抜き出していた。

さきの予告報道と同じく、『朝日』(6.3)は、6月2日午前10時に始まった式典を、「井伊掃部頭銅像除幕式と開港九十六年みなと祭祝賀式」とあらわし、

掃部頭曾孫・井伊直弘氏(四四)が彦根市からかけつけたのをはじめ、八百五十人が参列。平沼市長の孫、明子さん(一一)が幕の綱を切ると、二丈二尺の台石にのっかった一丈二尺の銅像が十一年ぶりで登場、盛んな拍手だ。一同横浜市歌のコーラスで祝い、掃部山の芸者たちがそろいのユカタ、赤いタスキがけで踊る。とそのようすを伝える。開国百年祭の終幕は同時に、開港九十六年祭挙行と直弼銅像の除幕となるとこの6月2日にはいくつもの記念が重ねあわされた。「雨中に多彩なフィナーレ / 開国百年祭 掃部頭銅像など除幕」と見出しをつけた『読売』(神奈川読売版6.3。神奈川読売A版は記事内容が異なる)は、

四月五日に開幕して二ヵ月にわたった横浜の「開国百年祭」はきのう二日、西区掃部山公園で行われた開港記念式典で幕を閉じた。朝からの雨に洗われて緑を増した同公園では、記念式に引きつづき井伊掃部頭銅像の除幕式が行われたのをはじめ神奈川条約締結記念碑除幕式〔中略〕などが行われ、多彩なフィナーレ風景を描いた。

と、祭典最終日の掃部山を報じた。式典出席者の談話も載せ 「井伊直弘氏の話『銅像自身もこの日を待っていたことでしょう。未長く港を見下しヨコハマの発展を祈ることと思います』」と祭典報道も閉じられたのだった。ふりかえれば、初代直弼銅像は、その除幕式を横浜開港五十年祭初日にあわせて1909年7月1日におこなおうとしたところ、それが延期させられてしまったという過去があった。開国百年祭の1954年に建立された二代目直弼銅像は、その除幕式が横浜開港九十六年みなと祭と連続した一体の行事として挙行されたのだった。初代銅像をめぐる紛議を知っていれば、この1954年の除幕式は、「銅像自身もこの日を待っていたことでしょう」とし、直弼の曾孫にとっても感慨深かったことだろう。

4. 横浜開港主唱者の顕彰 横浜が良港だと主張したと『市政概要』に記された佐藤政養、佐久間象

山、岩瀬忠震の3名は、どのような人物なのか²³⁾。

開国百年祭開催中の『読売』(4.4)紙上に連載された、「舶来事始ノハマ百年譜」の第9回「開港の恩人たち」をみよう。この記事はまず、「あす五日から幕をあける「開国百年祭」で井伊掃部頭の銅像が“開港の恩人”として港の見える丘にお目見得することになった」と直弼銅像再建の紹介がある。「戦時中(十八年)の銅像追放令」でそれが撤去されたこと、初代の銅像建立をめぐる「三転、四転」や「反対」「座折」、ようやく銅像が建てられたところでの除幕式への「横ヤリ」が示され、それというのも、「井伊大老といえは安政の大獄で吉田松陰、頼山陽らの志士を切り、西郷隆盛を島流しにした倒幕派のきゅう敵」にほかならず、「薩長派で固まった時の明治政府がこの銅像建設にいい顔を見せるはずがない」からだとの理由も明かされたのだった²⁴⁾。こうした直弼銅像建立への反対や横槍には、「銅像建設の賛成演説をブッて政府を攻撃、島田をバックアップしたのが薩長政府の封建性に反抗しようとしていたハマの貿易商人たち」だったというのだ。演説をおこなったという島田三郎は、『横浜毎日新聞』に記事を書き、衆議院議員に連続当選した経歴の人物である。

直弼の銅像は、「開港の恩人」として建立された顕章碑であり、また「五十年前の銅像はハマツ子のレジスタンスから生れたものである」。銅像が立つ地である横浜の市民が発揮した、意気や勲功をあらわす記念碑とも受けとめられているのである。だが、「開港の恩人」は直弼ひとりではないと記事はいう。「横浜の開港を決定した最高責任者はもちろん直弼だが、その直弼を動かした人々として象山がおり、政養がいた」と彼らが紹介される。さらに、しかし、と記事はつづき、象山は「当代の進歩的のインテリではあったが、身分は一介の松代藩士にすぎず、幕府に直接働きかけるわけにはゆかなかった」、政養も「幕府の軍艦操練所蘭書翻訳方にすぎず、勝海舟を通じて横浜開港の意見を述べていただけである」と、彼らへの評価が下がってしまう。この記事の眼目はもうひとりの功労者、岩瀬忠震を紹介するところにあつた。記事リード文も、「^(ママ)忘られた忠震の功績」と中央に大きくある。

忠震とは、なにをした人物か。彼は幕府の目付で、日米和親条約締結時にも「林大学頭の随員として横浜の応接場」に来ていた。1857年の11月には、老中堀田正睦に宛てた上申書で、「江戸幕府の基礎を固めるためには経済の中心も江戸に移さなければならない。そのためには江戸に近い横浜を開港すべきだ」と主張した。忠震は、日米修好通商条約には、「初代外国奉行となってこの調印式に出席した」とのかかわりをもつ。それを記事は、「彼の主張が実現されたわけである」と評価する。正確にいえば、調印時に条約には開港場に「神奈川」と書かれているのだから、忠震の横浜開港の主張は、このとき実現してはいない。だがこの記事では、忠震の主張を「大日本古文書」を典拠として示すといった実証性をいくらかではあれ明示し、かつ「石井横浜市大教授」の発言「現存の資料によるかぎり井伊大老に横浜開港を決意させた最初の人には岩瀬忠震だ」を参照し、これが「現代の歴史学界の常識にもなっている」と記事は教えている。しかし、このとき取材を受けた石井孝が「挫折した開国政策の推進者 岩瀬忠震」の章を含む『幕末非

²³⁾象山と忠震については、阿部安成「直弼ノ象山ノ忠震 - 競争する記念碑」(1)(2) (『彦根論叢』第370号、第373号、2008年1月、2008年6月、未完) 同「これは岩瀬忠震の伝記ではない。 - 伝記または評伝という歴史記述への問い」(滋賀大学経済学部Working Paper Series No.100、2008年5月)を参照。

²⁴⁾この記事の補足と訂正をすると、「港の見える丘」とは掃部山公園のこと、「銅像追放令」という法令はなくこれは「銅像等ノ非常回収実施要綱」(1943年3月5日)による、安政の大獄で処罰されたのは頼山陽ではなくその子の三樹三郎。

運の人びと』(有隣堂)を上梓するのは、開国百年祭のときからかなりのちの1979年となり、また忠震のまとまった1冊の評伝となる『岩瀬忠震 - 日本を開国させた外交家』(松岡英夫執筆、中央公論社)の刊行は1981年を待たねばならないのだから、「歴史学界の常識」とは記者の先走った見解表明といえよう。

開国百年のこのとき、忠震顕彰は、少なくとも横浜ではいまだおこなわれていなかった²⁵⁾。記事は「県、市ではこんどの「開国百年祭」に直弼の銅像を復元し、象山の顕彰碑」が建てられると予告し、「政養の事跡についても昭和二年に横浜郷土史研究会がその評伝を発行した」ことを伝える。だが、しかし「ただ一人岩瀬忠震だけはハマッ子に忘れられたまま歴史資料の中にわびしく名をとどめているにすぎない」と、そのいまだおこなわれない顕彰を記者は惜しんでいる。横浜での忠震の顕彰は、図書ではさきの石井の著書と、その翌年に発行された『横浜開港の恩人 岩瀬忠震』(森篤男執筆、横歴双書第1巻、横浜歴史研究普及会、1980年。横浜市中央図書館蔵)においておこなわれ、1982年の顕彰碑の建立によってその達成となる。

さて、さきに、50年まえにつくられた直弼の銅像は、「ハマッ子のレジスタンスから生まれたもの」ととらえる記事を見た。正確にいえばその初代銅像は旧彦根藩士有志によって建てられたのだから、市民が自分たちのレジスタンスの生成物とみてしまうことは、お門違いといえる。だが、すでにある建造物にみずからのレジスタンスを投影してしまうこと、またはそれを看取することは許されよう。あるいは、すでにある造出物から、それをみるものが、レジスタンスの気分や精神を醸成せしめられることもあろう。忠震の顕彰碑が、その例となる。この碑を建立しようとするきっかけは、「井伊大老の銅像が市内掃部山にあるのに、忠震の碑がないのはおかしい」と受けとめたことにあった(前掲森『横浜開港の恩人 岩瀬忠震』)。これは、いぶかしい、という疑問であり、また、変ではないか、という異議申し立てのあらわれともなる。直弼銅像が、それをみるものに、政府に潜む旧態やあからさまな反動をみせることへの反発や反感を見取ること、あるいは、なぜ直弼だけが死後も、なにかその功績が讃えられることをあらわす銅像というかたちを与えられたのかと問わせしめたり、または、なぜここに現秩序を攪拌しかねない異質物があるのかと憤らせたりするのだ。この憤りが、銅像の破壊に向かうこともあった²⁶⁾。そのかぎりであれば、銅像はまるでその像主がいなくても、その当人のようにふるまうことがあるといえる。

開国百年を記念したこのシリーズ記事で、「開港の恩人」を複数あげることが示された。ここで、「忘られた忠震の功績」と「十年ぶりよみがえる直弼像」と2行ならばリード文の大きさからいうと、後者が小さく、忠震のほうが目立った特別な扱いを受けているようにもみえる。だが、それは「忘られた」がゆえの措置であって、「井伊直弼の銅像を製作中の慶寺丹長氏」のキャプションがつき、製作中の銅像の写真が掲載された直弼のほうがやはり、記事の、したがって「開港の恩人」の代表となっているようにみえてしまう。開国百年を記念して顕彰碑が建てられるという象山にしても、その顕彰碑建立報道は、『神奈川新聞』市内版川崎横浜(9.30)に「あす除幕式 / 野毛山の象山記念碑」との予告がみえるだけで、さきの「横浜開港の恩人たち」の記事を載せた『読売』も、『朝日』『毎日』の地方版でも、少なくとも1954年の9月20日から10月10日までのあいだに象山顕彰碑建立を報道していない。顕彰碑の揮毫を横浜市長がおこなったとはいえ、もともと開国百年記念行事に組み入れられていなかった象山顕彰碑に、新聞各紙は冷

²⁵⁾ 忠震の郷土とされた場所では、1909年に彼の五十年忌追悼記念書画会が開かれたという。

²⁶⁾ 直弼銅像への襲撃は少なくとも1回、あるいは2回はあった。

淡である。

さて、直弼、象山、忠震とならんでこの記事にもみえた佐藤政養は、現代の高校日本史教科書には記されない、その点で日本史学習とは無縁の人物である。この政養についてみるとしよう。さきの『読売』記事が書いていたとおり、政養については、栗原清一編『佐藤政養先生遺物展覧会録 附小伝』（横浜郷土史研究会、1927年。国立国会図書館蔵）が刊行されていた。編者の栗原は横浜郷土史研究会会長、本書には神奈川県知事と横浜市長による揮毫も掲載されている。同書は政養を、「横浜開港の先覚者」（「序」）、「横浜開港の主唱者」「開港の恩人」（「緒言」）と評している。彼は1821年に山形で生まれた。

政養についてはべつの機会に論じることとして、ここではその文献情報について記しておこう。政養には横浜「開港の恩人」との賛辞が寄せられ、横浜郷土史研究会によって1927年9月27日から4日間、野毛山の横浜市立図書館で「佐藤政養先生関係遺物展覧会」が開催されただけあって、前掲栗原『佐藤政養先生遺物展覧会録 附小伝』（山）は、神奈川県立図書館、横浜国立大学附属図書館、横浜市中心図書館で所蔵されている。また、佐藤政養先生銅像建立奉賛会編『初代鉄道助佐藤政養』（佐藤政養先生銅像建立奉賛会、遊佐町、1965年。山）や、佐藤政養遺墨研究会編『政養佐藤与之助資料集』（佐藤政養先生顕彰会、遊佐町、1975年。山）も神奈川県立図書館と横浜市中心図書館にある²⁷⁾。横浜市中心図書館には、『佐藤政養コレクション』（交通博物館編、交通博物館、[19 -]、抜刷コピー）もある。

政養の生地である山形では、ウェブサイトをとおして、山形県立図書館の山形県関係文献目録検索で、彼の情報を得られる（2008年6月26日閲覧）。そこでは、以下の略伝もみられる。

サトウ マサヤス / 生没年：文政4.12 - 明治10.8.2 (1821 - 1877) / 初代鉄道助。飽海郡榊川村（遊佐町）生れ。〔中略〕名は与之助、後政養と改む。〔中略〕嘉永6年34才の時江戸に出て勝海舟の門下生となり、更に長崎の海軍伝習所に入り蘭人フルベッキについて測量や操艦術を学んだ。〔中略〕/ 当時、日米通商条約による開港は、幕府の方針で神奈川港となっていた。政養は江戸湾や横浜の地勢、将来性、政治外交上の問題等を研究し横浜開港を勝海舟に献言した。これがついに幕閣を動かして実現し、政養は横浜開港の恩人とされている。〔中略。彼のおこなった〕多くの調査はその後の鉄道建設に大きな貢献をした。〔中略〕不幸にして彼が精魂を傾けた大阪・京都間の鉄道が完成するのを目前に明治9年5月結核のため辞職し、翌年8月、勝海舟邸で死去した。/ 彼の多くの調査書類は鉄道創建時代の貴重な資料として鉄道記念物に指定され交通博物館に保存されている。また、昭和44年、横浜市の政養研究者尾形順一郎氏のコレクション政養関係資料が尾形家から遊佐町に寄贈され、併せて生家佐藤家所蔵資料も寄贈され、遊佐町佐藤政養先生顕彰会に保存されている。/ 明治11年海舟門下生により、青山の墓地に碑が建立、京都東山には勝海舟の題字になる「佐藤政養招魂之碑」がある。吹浦駅前には、昭和39年11月3日遊佐町有志により銅像が建立された。

前記政養関係文献のうち、「山」の記号をつけた図書や、それ以外にも、佐藤政養遺墨研究会編『政養佐藤与之助資料集（続）』（佐藤政養先生顕彰会、遊佐町、1981年）、菅原伝作編『佐藤藤佐・佐藤政養先生伝』（佐藤藤佐・佐藤政養両先生顕彰碑建立委員会、遊佐町、1990年）そして映像資料の『佐藤政養 日本鉄道の開祖 横浜開港の生みの親』（山形県生涯学習人材育成機構編、山形県生涯学習人材育成機構、1997年）などが山形県立図書館などにある。またさきの横浜での政養展と同時期の刊行物として、石垣吉六郎編『日

²⁷⁾ 『佐藤政養先生遺物展覧会録』は一橋大学や横浜市立大学、『政養佐藤与之助資料集』は横浜市立大学や東北公益文科大学にもある。

本文化の魁 鉄道の開祖 大横浜を生みの親 佐藤政養先生の伝(佐藤政養先生五十年祭協賛会、1927年)が、酒田市立図書館にある。

さて、この開国百年の年、彦根ではなにかおこなわれたのだろうか²⁸⁾。史料調査もまだ途中だが、『朝日』(滋賀版、54.8.24)に「井伊大老の座像発見」の見出しをみつけた²⁹⁾。8月14日に比叡山律院修験道場で、宝物の虫干しのさいに直弼の座像が発見されたという。かつて比叡山東塔正覚院が坂本にあったころ、そこは井伊家の祈願所だったので、1859年に「井伊老が自画像四幅と木造一体をつくって、それぞれこの祈願所に安置したもの」の1つだとのことである。この座像は彦根市に寄進されることとなったと報じられた。

(2) 1958年、横浜の開港百年祭

ここでは前項とのかかわりで、おもに横浜市の『市政概要』のなかで、開港百年祭がどのようにあらわされたのかをみるとしよう。『市政概要 1858年版』(横浜市総務局総合企画室統計課長染谷健郎編集責任、横浜市役所、1958年12月25日。横浜市中心図書館蔵)は、その表紙に「開港100年」と記し、扉につづいて、「横浜市徽章」とその由来、ついで市長と3名の助役の肖像写真の背景には、「5月10日、横浜公園平和球場に皇太子殿下をお迎えして開かれた横浜開港百年記念式典の盛況」とのキャプションがついた上空からの俯瞰写真を配している。つぎのページには、「御祝の言葉を述べられる皇太子殿下」の写真と、そのわきには

昭和三十三年は安政六年横浜が開港されてから百年に当たるため「横浜開港百年祭」として、各種の記念行事が盛大に繰り展げられたが、特に五月十日には横浜公園平和球場に皇太子殿下の行啓を仰ぎ、内外の賓客を招待して全市民こぞって“世紀の祭典”を挙行政した。

と記されている。元号で表記されるとわかりづらいのだが、昭和33年は1958年、横浜開港の安政6年は1859年となり、さきにもみた横浜での開国百年祭が、1854年の条約調印から百年となる1954年に記念祭典がおこなわれたのを参照すれば、開港百年祭は1年まえだおしで開催されたこととなる。だが、それについての説明は本書のどこにもない。それはともかく、「はしがき」では、「戦災の痛手からの立ち上りに懸命の努力をしている横浜にとって、わかき日嗣の皇子の御言葉は、まさに百年のよわいを寿ぐものであると共に、また来るべき百年の大発展を予言するものでありました」と祝福されているとおり、皇太子来浜は記念行事において特筆すべき出来事となっている。

『市政概要 1958年版』も前出の過去の版と同じく、まずは「1沿革」に始まる。ただし、この1958

²⁸⁾1953年のことだが、「嘉永6年ペリーが我国に来航して本年で丁度百年になり、各地で盛大な日本開国百年の記念行事が執行される。特に本市は開国に最も大きな貢献をし^(ママ)た井伊大老ゆかりの地であるので五月二十二日から二十四日まで開国百年祭の諸行事を取り行うのであるが、その一環の企てとして大老の「別段存寄書」に解説を附して刊行頒布する次第である」との企画が紹介されている(彦根市、彦根市教育委員会「あとがき」1953年5月20日、『ペリー来航に際して出されたる彦根藩主井伊直弼の『別段存寄書』』所収。横浜市中心図書館蔵)。ここに翻刻された「別段存寄書」は「単なる開国に興味を持った大名の建白書として見るべきではなく、このような幕政の一大事に於ける井伊家の家柄と任務は、他藩と大いに異つていること」をあらわす史料ととらえられている。本書の刊行は、井伊大老史実研究会の末松修の尽力によると示されている。

²⁹⁾以下、『朝日』滋賀版はマイクロフィルム版より引用した。滋賀版の表記は省略する。

年版は最初に「横浜歴史年表(抜萃)」があり、ついで「開港前」「開港後」、そして「横浜開港百年祭ノ～実施概要～」の構成となっている。年表は、安政6(1859)年6月2日の「横浜が開港された」に始まる。なお、ここには、「これ〔開港〕に先立ち1854年(3.3)日米和親条約が結ばれ1858年(6.19)日米修好通商条約が結ばれた」とも書かれているので、横浜歴史を溯れば、「開港」は日米和親条約に由来するとみせられたのだった。

「開港前」「開港後」の内容は、かつての版といくらか表記がかわったり、新規に追加された文章があったりするが、その基本は変わっていない。「横浜開港百年祭ノ～実施概要～」をみよう。ここでも、「横浜は安政6年開港以来まさに一世紀の歳月が流れた。〔中略〕本市はこの開港百年に当る1958年という有意義な年を記念」するとくりかえされ、実際には開港99年めに百年祭が実施されたことの説明はみえない。開国百年祭が和親条約締結日から横浜開港記念日までの開催となったことを照らしてみると、5月10日から6月2日までの開催となった開港百年祭について、その始まりがなにの記念日かは明記されていない。列挙された事業は、(1)横浜開港百年祭記念式典(5月10日、平和球場)(2)国際仮装行列(5月11日)(3)井伊掃部頭その他物故功労者感謝祭(5月18日、掃部山公園)(4)広報、(5)国際貿易会議、(6)開港百年記念事業、である。(6)には市役所関係と各区役所の催しが総数121件あげられている。

5月10日の記念式典では、皇太子の祝辞につづいて「故人となった開港功労者31名(外人13名を含む)の顕彰」がおこなわれ、「日本人功労者を代表して井伊掃部頭曾孫彦根市長の井伊直愛」に顕章状が手渡された。顕章状を贈られた31名のなかには、直弼のほかに堀田正睦、岩瀬忠震、佐久間象山、タウンゼント・ハリス、ペリー・マシュー・カルフレイス(原文のまま)らがいた。5月18日に掃部山公園でおこなわれた「井伊掃部頭その他物故功労者感謝祭」には、「井伊掃部頭子孫、彦根市長井伊直愛氏をはじめ高島嘉右衛門・茂木惣兵衛等八マにゆかりの深い人々の子孫、関係者など約1,000名が参列した」。実施概要では、「祭典の各行事は〔中略〕いずれも空前の盛況であり、本市発展史上特筆すべき行事であった。その大要は以下に述べるとおりであるが、そのスリー・メイン・イベントとして、記念式典、国際仮装行列、井伊掃部頭他物故功労者感謝祭が挙げられる」と冒頭部分に記されていたのだから、物故功労者への感謝祭は重要な行事であり、その筆頭に直弼がおかれたのだった。本書最初の章となる「1沿革」の扉には、「横浜開港の恩人井伊掃部頭銅像 掃部山公園」のキャプションで、直弼銅像をその左手から撮った写真が掲載されている。すでにみたとおり、この銅像は4年まえに開国百年を記念して建立された二代めである。この写真は、初代銅像建立時の1909年に、直弼の子直安が寄贈した水飲み施設も写っている。だが直弼の背景には戸部の町並が広がっていて、その銅像がどこを向いて立っているのか(それは海なのだが)はわからない構図となってしまった。前出の開国百年祭のときの『開国百年記念絵入り横浜歴史年表』のデザインとは、かなり異なる。横浜に立つ直弼銅像にはふさわしくない構図とみえるだろう。

『横浜開港百年祭記念式典招待者名簿(日本側)』(〔横浜市〕〔1958年〕横浜市中央図書館蔵)が残っている。そこには、計3706名の招待者名が記されている。1貴賓、2中央官庁関係、3地方公共団体関係に始まる名簿の12として顕章者遺族31名があり、正睦、忠震、象山、ハリス、ペリーの遺族がいずれも「調査中」となっているなか、ひとり直弼については顕章者遺族として前出の彦根市長直愛の名が載っている。幕末の幕府要職者と外交官のなかでは、まさに直弼虫壇の場として開港百年祭があったのだった。

開港百年祭については、その写真帖がつくられている。その『横浜開港百年祭記念写真帖』(〔横浜市〕1958

年]横浜市中央図書館蔵)の、横浜市長による「序」は、「今年は、安政六年六月二日に、当時一寒村に過ぎなかつた横浜が開港されてから百年になります」と説き起こされる。すでに4年まえに開国百年祭を挙行してしまったのだから、まさに横浜が開港してから百年のこのときであっても、それを「開国」ということはできないのだろう。『市政概要 1958年版』にもこの記念写真帖にも「開国」の語はみえない。

記念写真帖は、「皇太子殿下のおことば」が冒頭におかれ、「式典当日の会場(平和球場)とその附近」(これは『市政概要 1958年版』に掲載された写真と同一)に始まる122葉の写真を載せている³⁰⁾。「功労者の表彰」写真には横浜市長、皇太子とともに写る直弼の曾孫直愛のすがたもみえる。5月18日の「井伊掃部頭その他物故功労者感謝祭」のようすを報せる写真は3葉あり、「奉納舞楽」「物故者遺族」「神前で祭文を奉納する田中横浜市助役」のキャプションがある。3葉めの写真は、直弼銅像のまえに祭壇が設けられているようすをあらわし、これをみると、神前とは銅像まえとなり、まるで直弼銅像が神像であるかのようにもみえてしまう。

開港百年祭記念行事には、市役所関係の京産行事として「モレル氏記念碑除幕式」(5月3日)と「岡倉天心生誕記念碑除幕式」(5月16日)もあがっていた。両者のようすも(前者は「鉄道開通の功労者」)、記念写真帖におさめられている。開港百年を記念して顕彰され、その碑が建立された人物がふたりいたのだった。

「横浜開港百年」と題された三つ折1枚のリーフレットをみよう(横浜開港百年祭実行委員会、1958年。筆者蔵)。これは、「横浜開港百年の歌/歓喜の港」の譜面と歌詞、「開港百年祭行事一覧表」をみせるとともに、市長名による「開港百年祭について」、「横浜開港百年の歩み」、「ミナト横浜の今昔」を載せたリーフレットである。市長の「開港百年祭について」は、「今年は、安政6年6月2日に、当時一寒村にすぎなかつた横浜が開港されてから百年になります」との定型化された文章に始まる。この百年はまさに「今日までの発展の歴史」となり、それをふりかえると、「まず、一世紀前に、鎖国と開港の二つの世論の分岐点」があったと知るといふ。そして、そこに「たって、決然として「開港の断」を下した井伊掃部頭をはじめ多くの先覚者達の偉大な卓見と勇氣に敬意を表したいと存じます」と市長は記したのだった。そのあとでも、「横浜が一転して国際貿易港としての第一歩をふみだ」したことは、「わが国の長い鎖国の夢が破られ」たことなのだ、と説いている。

開国百年祭のときには、開国と開港とが曖昧にされたり開国は開港への第一歩とあらわされたりしながら、1854年の日米和親条約締結を起点とした開国百年祭が横浜で挙行されたのだった。この開港百年祭では、操作や工夫は不要となり、鎖国と開港が対比され、前者の解除がすなわち後者だと示されたのだ。横浜が「欧米文化を吸収して、今日のわが国の文化をきづきあげる重要な門戸となった」との自負と自尊があればこそ(こうした表現自体は、前出のとおりこれ以前にもあったが)横浜開港以前は、国は鎖されていたのだといふのである。この自覚があるから、「横浜開港百年の歩み」を、1854(安政1)年3月3日「日米和親条約(神奈川条約)がむすばれた」から始めても不都合はないこととなる。鎖国と開港を対比するとなると、直弼など多くの「先覚者達」が横浜のなにをめぐってそのゆく先を見抜いたこととなるのか それは「開港の断」となる。

³⁰⁾掲載枚数については、「序」には148枚、「編集後記」には124枚と記されている。

「ミナト横浜の今昔」は、「百年前の横浜の街」と「現在の横浜の街」とを写真で対比し、「文久時代」「大正初期」「現在」の大棧橋をやはり写真で見比べられるようにし、また、「神奈川横浜新開港図 貞秀筆（万延元年）」「横浜波止場海岸通異人館之真図 広重（3代）筆（明治3年）」の横浜絵と「現在の横浜港」の写真とを対照できるデザインとなっている。この一面の題字下に、「井伊掃部頭直弼（大老）」の肖像画と「タウンゼント・ハリス（米領事）」の肖像写真とが配されている。その下に、「日米修好通商条約文」の写真と、「開港当時の横浜港」の絵図があり、前者の写真には「岩瀬肥後守」などの自署もみえる。写真につけられた説明文は、「この条約は1858年（安政5年）6月19日、神奈川沖のアメリカ軍艦ポーハタン号上で、アメリカ代表ハリスと日本代表井上信濃守直清と岩瀬肥後守のあいだでおこなわれた」となっている。

「横浜開港百年の歩み」年表をもういちどみよう。1859（安政6）年6月2日「横浜が開港された」のところには、

はじめ神奈川町が開港地に予定されたが、幕府はこれを横浜にかえた。横浜が良港であることを主張した人人に、佐藤政養（まさのり）佐久間象山（ぞうざん）岩瀬忠震がいる。

と付記されている。すでに開国百年祭のときに『市政概要』の1953年版、1954年版などに登場していた記述が、ここでも用いられている。年表の日米修好通商条約締結の項の説明にも、ハリスと、清直、忠震の名が記されている。一方、直弼はというと、大老就任と桜田門外での暗殺の2回しか年表に登場しない。年表をみるかぎり、横浜開港百年の歩みのなかに直弼がどのような事績を残したのか、これではわからないのだ。

だが、これでよいのだろう。この『横浜開港百年祭』というリーフレットのなかに、政養、象山、忠震のだけひとりその肖像が掲載されていない。忠震をのぞくふたりが横浜良港の提唱以外になにをしたかは、リーフレットにも『市政概要』にも書かれていない。このリーフレットの外に出ると、開港百年のこのとき、『市政概要 1958年版』にその肖像が掲載されたのも直弼ひとり（正確には直弼の銅像写真）、政養をのぞくふたりは物故功労者感謝祭にその遺族が招待されようとしたが、遺族の所在は「調査中」であり、おそらく来場しなかったことだろう。開国百年の1954年からこの4年のあいだに、象山をのぞくふたりは展示や建碑など文字以外のメディアでの顕彰はおこなわれていない（政養の展示はるか過去の1927年のこと、忠震の追悼記念書画会は1909年だった）。そして1958年のこのときまでに、この3名の姿をかたどった肖像彫刻は、横浜市内のどこにも建てられていないのだ。象山の顕彰碑は、文字だけがそこに刻まれていた。

すでに2つめの銅像も横浜に立ち、物故功労者の筆頭にその名があげられた直弼は、その肖像彫刻が、その設置のときも物故功労者感謝祭のときもまるで神像のように扱われ、普段は港を見下すとみられている港横浜の象徴となっていたといえよう。横浜開港の功労者が複数いればいるほど、そのなかでの直弼は群を抜いていることとなるのだ。

この開港百年の年、彦根ではなにかあっただろうか。横浜で開港百年祭がおこなわれているさなか、彦根史談会が「開国百年を記念して、郷土が生んだ開国の偉人「井伊大老」の単行本千部を印刷、このほど発行した」という（『朝日』58.5.5）。執筆者は彦根史談会幹事長の矢部寛一。「青少年向にわかりやすく書

かれています」というその概要は、

大老が彦根城内楽々園（現在旅館）に生れてから、青年時代、埋木舎（現存）で苦しいなかにも勉強したこと、四十二歳（一八五八年）で大老職につき、尊皇じょうい（攘夷）の世論の強いおり、開国の条約（安政の五国条約）を結び、遂に桜田門外で暗殺されるまでの一生がつづられている。

と紹介されている。「開国百年を記念して」とは勘違いか書き誤りかとおもったが、「開国の条約（安政の五国条約）」とも記したのだから、修好通商条約調印を開国とする確信のあらわれなのだ。

彦根の直弼銅像が移転されたのも、この1958年のことだった（『朝日』6.26。「金亀公園へ移る井伊大老銅像」のキャプションつき写真を掲載）。護国神社境内にあった銅像の移転が、6月24日の市議会産業土木委員会で決定となった。これまでに、「県遺族会、市史談会などから環境がよくないなどを理由に移転を希望し、観光審議会でも金亀公園への移転を答申していた」。9月ころという移転により、直弼銅像は金亀公園の現在の位置に立つこととなる。管見のかぎり、『朝日』紙上に移転完了の報道はなかった。護国神社境内に銅像があることが、銅像にとってよくないというのか、護国神社にとって邪魔だったのか、詳細はいまのところわからない³¹⁾。

横浜開港百年のこの年、彦根でも「市文化祭行事の一つ、開港百年記念展」が11月1日から3日間、中央公園の産業会館で開催された（『朝日』11.3）

会場には狩野永岳筆の井伊直弼公の座像がかかげられ、井伊家が保存している百三十年前の「世界人種風俗図」や、村岸コレクションで有名な元豊郷村長村岸峯吉氏出品の「横浜外国人遊行図」などの版画その他、開港にまつわる珍しいものが並んでいる。

との記事にそえられた写真は、画家上田道三が「病氣とたたかいながら二年間、故郷の美を残そうと取り組んできた六平方メートル大の旧彦根城の全景図」で、それは「参観の人たちの評判になっていた」と報じられている³²⁾。

さてこの節の最後で、さきの矢部寛一『開国の偉人 井伊直弼』を開いてみよう³³⁾。本書は表紙にアメリカ国旗を掲げた黒船の絵を載せ、「はしがき」に、アメリカのワシントン博物館に「日米外交の功労者」として「井伊大老の像が飾られてあること（その写真掲載）、1954年に「大老の子孫である井伊直愛」が「米国に招かれて、ペリー百年祭に参列」したこと、「今年は大老が日本の開国を断行してからちょうど百年」となること、を記し、直弼が「なぜこのように国際的に、偉大な政治家としてみとめられているのでしょうか」と問うたうえで、「私は大老の本当の歴史をみなさんに知ってもらいたい為に、この本を書いたのです」と読者に呼びかけている。なぜ直弼が世界規模で偉大な政治家と認められているのか、という

³¹⁾断片の史料のみで詳細は不明ながらも、1940年に「県護国神社の敷地拡張」にともなって直弼銅像の移転が検討されている。東京の井伊家と協議中とのことだが、彦根市は「移転を断行」するもようと報じられている（『大阪朝日新聞』滋賀版、40.4.21）。同年6月13日の市参事会で金亀町の市公会堂前庭に直弼銅像を移転することと決まった（同前、40.6.14）。その後の動向を追跡していないが、戦時下で移転がうやむやになるなか1943年の金属回収による撤去となってしまったのではないかと推察される。

³²⁾この直弼の画像は、2008年彦根城博物館の「井伊直弼 大老への道のり」展（後述）で清涼寺蔵のそれが展示された。これは、後掲『柳王余光』では安政7=1860年1月に「狩野永岳に命じて四位中将の画像を画かしめ自詠「あふみの海」の歌を賛して清涼寺に納む」という。

³³⁾使用した版は、1958年5月8日の再版（初版発行は5月1日）の『開国の偉人 井伊直弼』で横浜市中央図書館蔵。著者の矢部には『青年首相井伊大老の政治と日米外交』（日乃出版、1931年）の著書もある。この著作は1951年にも大光社から刊行される。

問いと、直弼の「本当の歴史」とが結びつくとの前提で、ここにその歴史を記す、というのだ。「はしがき」のページをめくると、ペリー提督と井伊大老の肖像画が両者ならび、その下に、直弼が「断行」した「開国」による遣米使節のイラストがある（1860年に大老が派遣とのキャプション）。

本書は前出の新聞記事にあったとおり、編年体での直弼の評伝となっている。記述のあれこれがあらかじめ、のちの大老就任や開国の英断につなげる記し方となっている。そうしたなかで、「日本国内の騒ぎ」では、ペリーの要求への対応について、「当時全国の諸大名のうちで開国説をとらえた人はわずか二、三人でしたが、最もはつきりと強く開国を主張したのは、彦根藩主井伊直弼より外になかった」を記す。そして、嘉永6年8月の、「当時としては実に立派な意見」を「開国意見書」として幕府に提出したと示される。事態は直弼の主張の方向で推移し、安政1年に神奈川条約が結ばれる。これは、「まだ開国はしないが喧嘩はしないでおこうと云う」「仮条約」なのだととらえられる。ついでハリスが来て、日本との貿易をもとめる。「このような困難な問題が沢山ある時代には、余程しっかりした人物が出て世の中を治めると共に、外国に対しても堂々と外交をやってくれる人でないといけな」との前置きをしたうえで、直弼の大老就任となる。直弼の主張は、絶対戦争反対、だった。誌上で直弼褒めが展開してゆく。

ここまでのところで、日米修好通商条約締結百年のときに出版された本書が、新聞報道で「開国百年を記念」しての刊行だとみなされたり、直弼の偉業として「開国」をあげたりできるのも、1854年締結の条約を「仮」ととらえ、これではまだ「開港」とはならず、直弼の「決断」で1858年に「米国に対し日本を開国することの条約を結んで調印を断行した」とする歴史意識にもとづいてのことであった。この記し方を受けて、さきの本書刊行の報道も1858年締結の条約を「開国の条約」と書くこととなるのだ。

本書には、「日米通商条約調印の場面」とのキャプションがついたイラストが載っている。これよりまえのページやうしろのページにあったハリスの肖像画に照らせば、調印の場面でテーブルの向こうに座る人物がハリスだとわかる。他方で、テーブル手前の日本人はすべて後姿となり、また本文でもそれがだれなのかは記されていない。この調印の場に直弼はいなかったし、座席の位置まではともかくも、忠震が座っていたはずなのだ。だが、本書では忠震のことも清直についても一文字も用いられていない。

そして貿易港の開港となる 「大老は横浜港の建設をした」の見出しに始まる本文で、（すでにまえのページで開港場5港として、「神奈川（いまの横浜）」と示されていた）「横浜の港を最初に開拓する様に計画した人は井伊大老であつた」と教えられたのだった。その証拠にというつもりなのだろう、

町の中央の掃部山には井伊大老の銅像が、横浜の町を見下すように建設されてあります。それは横浜市民が横浜の港を開いた功労者として、感謝の心から立てたものであります。

というのだ。その記述の2ページあとに、「横浜掃部山における井伊大老銅像」の写真が載る。条約文書にいう「神奈川」がいまの「横浜」ではないことは、前掲『市政概要』1953年版、1954年版、1958年版のすべてに記してある。また、横浜にいけば掃部山が町（横浜の）の中央でないこともすぐにわかる。そして、銅像台座裏面にある碑文には直弼は「開国に由緒深き」と刻まれているのであって、その碑文には「開港」の文字はない。直弼褒めの表装をめくってゆくと、書割のような舞台裏がみえてしまうようだ。もっとも本書は、表紙でまず、「開国の偉人井伊直弼」を描くとはっきり表示していたのだから、直弼は「開国の偉人」としてあらわされなくてはならず、そうなる、脚色も必要となるのだろう。また、なぜ、彦根で発行された直弼の評伝に、彦根の直弼銅像の写真を掲載したりその解説を載せたりしないのだろうか。

理由は明瞭だろう。彦根の直弼銅像は、開港場となった横浜の町を見下していないからだ。直弼を「開港の偉人」といってしまうと、それでは彦根のどこに港があるのかとか（彦根に港がなくはないが）、開港となるとそれは横浜や神戸のことだとかと遠ざけられてしまうかもしれない。横浜開港と日本開国とを重ねあわせ、それを成し遂げたナショナルな規模での「偉人」として直弼を讃える、その表現法がここにもあらわれているのだ。

本書には、「安政の大獄」の見出しもあり、そこでは、「暴力革命の陰謀のあることを幕府が探知したので、〔中略〕それらの疑いのある人達をとらえてこれを処罰しました」とまず記される³⁴⁾。

これを世間では安政の大獄といつたのですが、これも当時の国法に従つて、国家の安全と秩序とを維持する為にやむを得ず行われた処罰であつたのです。

と説かれてしまう。本書執筆の現在、直弼のおこなった処罰は正当だった、と評伝作者がといいうとしても、当時はそう受けとめない「反対派」をつくりだしてしまった。それは評伝作者も知っている。彼らは「大老をこのままにおいては、日本は外国の為に亡ぼされるといつて、大老を殺してしまえと云う声がかんたんと高くなつて、それが彦根藩にも届く。さまざまな忠告を直弼は聞かず、「自分の命はどの様になるうとも、絶対〔大老を〕やめる積りはないと言い切つて頑張りました」「大老はこれまで日本の政治責任者として、人のため世のため男らしく信念を実行して来ましたので、今となつては、たとえ殺されても男子の本望だとかたく覚悟していたのでした」との賛辞が直弼に寄せられる。男らしさや、男子の本望を価値として造形された直弼像である。

こうした直弼伝のすえに、作者は読者に、「さて皆さん、この人たちの暴力行為が、はたして、正当であつたでしょうか」と問う。もちろん作者は、正当ではない、という答えを用意している。その根拠は、

大老の実行した政治は、五、六十年後には立派な実を結んで日本は世界の一等国として英米と肩をならべるところまで国力が発展しました。このことは歴史がはつきりと、大老の政治の正しかつたことを証明しているのであります。

という。日露戦争後にして満州事変まえの時代を暗示して、その当時の「一等国」としての日本の位置から、その源として作者が設定した直弼の正を評価しているのである。

本書は末尾で、「大老の研究書や、いろいろな作品や、桜田門外で防戦した武士たちの遺品は、彦根城下の大老記念館や、井伊美術館内に残されてあります」と記して終る。ここに記されたとおり、1949年以降の彦根では、たんに直弼銅像を再建したにとどまらず、史料の展示や書籍の刊行などをとおして、直弼を史料に即して顕彰しようとする展開もみられた。ただしこの動向も、19世紀末からおこなわれた直弼へのいわば歴史の付与の歴史のなかにおかれなくてはならない。

(3) 1960年、大老と開国の百年祭

1960年の年頭の新聞に、「開国記念井伊大老百年展」の開催広告が掲載された（『朝日』60.1.12。以下、発行年を省略して月日のみを記す）。会場は、京都駅まえ丸物5階催場、会期は1月15日から28日まで。

³⁴⁾ 安政の大獄と呼ばれる直弼の所為を「暴力革命」阻止だったとする見方は、1954年開国百年の横浜でおこなわれた開国百年記念歴史展をめぐる報道でもみられ、1953年に翻刻された「別段存寄書」の解説でもペリー来航後の攘夷運動に「暴力革命の企図」が看取されていた（前述）。

主催は朝日新聞社で、滋賀県、彦根市、彦根市教育委員会、京都市教育委員会、京都アメリカ文化センターが後援する。展示の「主な内容」は3つに分けられ、「開国関係資料」は、

ペルリ来航当時のパネル写真(米国大使館蔵)、百年前の日米両国旗、遣米使節のみやげ品、記念メダル(大阪・松浦悦次郎氏蔵)、井伊大老銅像、同肖像(東京豪徳寺蔵)、長筒望遠鏡、オクタント(海上大砲照準器)、桜田事変井伊家供立図、同殉難土遺品、井伊直弼年表

「人間大老関係資料」として、「売女の禁止を望む書、自作の和歌や画、陶器、手芸品」、「井伊家伝来品と大老遺愛品」に、「ハエ取り馬標(うまじるし) 井桁の赤旗、大老具足と差料、能衣装、その他数十点(いずれも井伊家蔵)」である。展示開始前日の『朝日』報道(1.14)では、「豪華な遺品類/井伊大老百年展」の見出しで、展示品のいくつかが紹介され、「眼を見張る豪華な品ものばかりだ」との賛辞が寄せられていた(「大老が着用していたヨロイ」写真も掲載)。なかでも、「特に大老と関係の深い桜田門で殉難した武士たちの遺品も加えられ、刀傷を受けてソデのちぎれた羽織、戦いのあとをしのばせる血染めの刀や柄袋もあった」との宣伝は客寄せに一役かうかもしれない。井伊家より提供されたこうした遺品は、およそ70点。直弼をめぐる展示は、これまでに「東京と横浜で開かれたことがあるが、関西ではこんどが初めて」という³⁵⁾。それだけに、「彦根市内の各種団体は大きな期待を寄せており、期間中大挙見学に行くことにしている」との期待と勢いが報じられている。この日の紙面にはまた、二段抜きで「開国記念井伊大老百年展」の広告も掲載されていた。黒船の簡略化されたイラストと、「幕末の政治家井伊直弼がなしとげた開国の偉業を、新しい視野から見た数々の資料を、パノラマ・ジオラマ・実物・写真等により展示致します(入場無料)」との案内もみえる。展示が始まったところでのやはり二段抜き広告(『朝日』1.21)では、(なぜか後援者が滋賀県と彦根市、そして井伊大老開国百年祭奉賛会だけとなった)、この年の「10月初旬/彦根市」での「大老開国百年祭」の予告が、わずか3行でかんたんに掲げられている。

前出の開催広告(『朝日』1.12)には、短文の開催趣旨も掲げられていた。

幕末の政局担当者として根強い反対を押し切り、開国を断行した井伊大老の死後、今年が百年に当たり、同時にわが国初の遣米使節が派遣されて百年になるのを記念し、当時の事情を解明するため「開国記念・井伊大老百年展」を開きます。

なぜ、1960年に、直弼を記念した展示をおこなうのか、それができるのか、というと、1つには直弼没後百年であり(1860年没)また咸臨丸での渡米で知られる日米修好通商条約批准から数えて百年ということなのだ。記念の取りかたは続報でも示され、「井伊大老百年展開く」(『朝日』1.16)の見出し記事では、「ブカナン米大統領と江戸幕府外国奉行新見豊前守とが、日米通商条約の^(調印)をしてから、今年で百年になるが、この開国を記念する」展示をおこなうとも説かれる。条約批准(記事では「調印」)が「開国」なのだ、との歴史認識である³⁶⁾。なお、展示初日は、井伊彦根市長夫妻も来場、「成人の日とあって、昼

³⁵⁾実際には1909年10月に彦根で彦根教育会による「教育資料展覧会」において直弼や井伊家ゆかりの品が展示されたことがあった。ただしこのときはいまだ直弼展とは銘打てなかったのではない(前掲阿部「故井伊直弼を考課する。」を参照)。その後も1940年に彦根で4月10日(太陰太陽暦の3月3日)に井伊直弼朝臣顕彰会による八十周年記念祭典がおこなわれ、それを報道する記事の見出しは「井伊大老を偲ぶ」となっていた(『大阪朝日新聞』滋賀版、40.3.24。マイクロフィルム版)。わずか20年まえのことがすでに忘れられてしまったのか、あるいは彦根以外には記念祭典の挙行がよく知られていかなかったのか。

³⁶⁾詳細は不明ながらのちの彦根での行事を「彦根市最大のフェスティバル大老開国百年祭は、あす一日から五日間、日米修好百周年記念行事の一つとして」おこなわれたとする報道もある(『朝日』9.30)。批准を条約締結

ごろから続々観客が詰めかける盛況さだった」という「井伊大老百年展会場」の写真も記事に添えられている。

「開国百年」とされた年の『朝日』滋賀版報道はつづく 「彦根城シャチの除幕式」(3.8)、「井伊大老に關係の / 民間外交文書を発見」(3.22)、「井伊大老たたえて / 彦根市で二つの催し」(3.29)、「民謡踊りや記念茶会 / 彦根城 21 日に完成式」(5.7)、「大名行列も繰り出す / 井伊大老開国百年祭多彩の行事本決まり」(5.19)、「“五百年間は大丈夫” / 彦根城天守閣あす復元完成式」(5.20)、「海外から百五十万円 / 彦根大老百年祭に寄付」(7.20)、「82 年ぶり見事に復元 / 彦根城の佐和口多聞ヤグラ」彦根で大老歌碑完成」(9.25)、「大老展や風俗行列 / 彦根多彩に開国百年祭」(9.26)、「アーチ・ちょうちん飾り / 大老開国の百年祭 前景気あおる彦根市」(9.29)、「大老開国百年祭あす開幕 / 式典に米人ら千人 / 偉業しのぶ多彩な催し」(9.30)、「彦根駅前に街路灯」「本社機もきょう空から祝福 / 大老開国百年祭」(10.1) 直弼、彦根城、彦根の華やかな話題が新聞紙上に連続した。

開催前にこの祭典は、どのように広報されていたのだろうか。開催の前年には、

大老井伊直弼が桜田門外に殉国されてから、来春は満百年にあたります。この記念すべき年にあたって われわれ六万の市民は、大老の偉業を想起し、さらに公の開国精神を受けついで、明日の新しい彦根建設へ前進するための、意義ある百年祭を行いたいと存じます。

と告知されていた(『広報ひこね』彦根市役所、1959年7月1日。以下『広報ひこね』59.7.1と略記する)。直弼は桜田門外で、

開国を非とする者の凶刃に倒れたのでありますが、大老を倒し政権を握つた人々も世界史の流れをどうしようもなく、大老の開国の大方針は、和親^(ママ)修交の国是となつて宣布され、日本近代化の基は実に大老によつて確立されたのであります。

このことを、「大老の偉業〔として〕顕彰」することが、この祭典の要諦となった。この根本方針から、記念事業の第1に、「開国記念館の建設」が掲げられたのだった(『広報ひこね』60.5.1)。竣工したての新施設では、「井伊大老展」の開催が予告されていた(同前 60.9.26)。彦根市はくりかえし、「鎖国の長い夢を破つて決然開国の断を下した大老の見識と勇気」や、その「開国の精神」をいいたてるのだが、1960年の祭典は、その名称に「開国」とうたいながらも、「大老井伊直弼が桜田門外に殉国されてから、本年は満百年にあたります」としか数えられないのである。祭典開催を告げる紙面には、「P・Rひこね」として「大老の生涯」を伝える囲み記事もある。そこには、

嘉永六年(一八五三年)六月、米国より開国をせまりこの混乱した国内と困難な問題があるとき、直弼は大老職につき、日本を鎖国から解放することが国全体の利益になると考え、安政五年(一八五八年)六月開国の条約に調印を断行した。

と記されている。鎖国=開国=修好通商条約締結となり、前引の箇所でもみたとおり、「和親修交」、いいかえれば1853年から1858年の外交事項を1つにとらえる歴史の見方のあらわれである。推測すれば、ペリー来航、和親条約締結、修好通商条約締結のいずれであれその百年記念の事業をおこなうには、1960年のこのときもはや遅いのだ。日米修好通商条約批准百年といえよのだが、それに彦根市は気づかなかつ

の最終確認とすれば、それがおこなわれた1860年からの百年を「日米修好百周年」と数えることは理解可能。ただしそれを「開国」とするかは問われてよい。

たのか、開催まえの広報ではそれが示されていない。やはり同じ紙面に載った「大老開国百年祭奉賛行進歌」は、「国をひらいた大老の / いさおたたる百年祭」と歌うのだが、「開国百年」と掲げながらも、1960年が直弼没後百年とだけ数えられてしまう奇妙な様相が、彦根であらわれていた。市の広報もみせているとおり、この祭典は「井伊大老殉難百年祭」(「駐日米国大使メッセージ」『広報ひこね』60.11.20)と呼ぶことがふさわしいのである。

彦根での井伊大老開国百年祭はどのような企画となっていたのか。まず、開催初日の10月1日午前10時30分から、彦根東高校体育館に「高松宮ご夫妻を迎えて開かれる記念式典を中心」に、それにさきだつ開国記念館落成式(午前8時)、陸上自衛隊編隊ページェント(彦根市上空、午前10時)、各新聞社祝賀飛行(彦根市上空、午前10時15分から30分まで)、江戸時代風俗行列、1~3日の企画には日本甲冑展(産業会館)、1~5日には彦根城今昔展(商工会議所)、大老献花(開国記念館)、彦根郷土物産展(御馬部屋)、開港展(佐和口多聞櫓)、井伊大老展(開国記念館)、2日には大カーニバルなど、その後も新能(3日)、芸能大会(5日)などが予定されている(『朝日』9.26)。5月19日付の報道で開催が予定されていた、3日の「幕末殉難者の慰霊報告祭(彦根城)」や、5日の「護国神社大祭」がどうなったかは、わからない。「多彩の行事本決まり」と伝える記事では、井伊大老開国百年祭の開催目的を、「彦根が生んだ開国の恩人井伊大老を顕彰するため」と掲げ、開催期間中は「記念式典、大名行列などが繰り出し、市内をお城ブーム一色に塗りつぶす計画」との意気込みが、祭典開催のかなりまえから紙上にみえていた(『朝日』5.19)。

「大老開国百年祭 / 花やかに祝賀絵巻き」(『朝日』10.2)と讃えられて祭典が始まった。式典会場となった彦根東高校体育館には、千余人が集ったという(『広報ひこね』60.11.20では1200人)。しかし、朝からの小雨のために、陸上自衛隊編隊祝賀飛行は中止となり、「外人は領事らわずか七、八人で、開国記念祭にしては国際色にやや乏しかった」という難点も指摘されてしまう。「呼びものの大名行列と元禄花見踊りは、総勢二百三十人」(写真掲載)その「ほとんどが滋賀大学経済学部の学生と、洋裁学校の生徒さんらのアルバイト」で、コースは西中学校、いろは松、銀座商店街などおよそ8kmの一巡だった。記事は、「お祭り気分はしり上がりに高まった」と結ばれた。この紙面には、百年祭を伝える5葉の写真が掲載されている。そのうちの2葉に、「大老の銅像前で記念撮影する来賓の外人たち」「銅像前記念植樹」との説明がついている。キャプションからしても写真の構図をふまえても、この1葉の写真の主演は「外人」、もう1葉はアメリカ領事と高松宮夫妻であって、直弼銅像はその後景に退いている。井伊大老開国百年祭とはいえ、当然のこと主演とってよい大老直弼を会場に呼ぶことはできない。しかし、それならば直弼銅像をもっと活用してもよさそうなのだが、それは祭典の添景でいどにしか写し出されていない。横浜での開国百年祭や開港百年祭では、もっと直弼銅像が活かされていたではないか。

10月1日の式典では、滋賀県知事の式辞や彦根市長の挨拶が披露された。市長は、直弼の事績をかえりみて、「決然攘夷を排し、敢て開国を断行し、わが国近代化の基を成した」のだが、「戦前の史論はこれを是とせず、いたずらに公に対し、朝敵或は逆賊の汚名を冠した」、しかしようやく、「違勅の非難がいかにか大老の苦衷を察せざる皮相、独断的なものが史実を通じ、光明をみるに至りつつありますことは、せめてもの公へのたむけとなるうと存ずるものであり」ますと、直弼観の転換が「史実」をもとにおこなわれつつある感慨を開陳したのだった(『広報ひこね』60.11.20)。市長はまた、1960年を「日米修好百年の記念すべき年であると同時に、修好条約締結の責任者であつた直弼公が桜田門外で殉難してから丁度百年目

にも当ると挨拶で陳べていた。これまで、たとえば『広報ひこね』で示されていた直弼没後百年記念という祭典の方針と、祭典の内実や新聞での祭典報道の内容とが、ここに一致したのである。祭典初日に彦根市長によって、1960年挙行のこの彦根の祭典は、直弼没後百年=日米修好百年を記念すると宣言されたのだ。

翌3日付の『朝日』紙面にも、「彦根市、大老百年祭でわく/天守閣へ十万人/町にカーニバル行進」の見出しがみえ、「今シーズン最高の人出でにぎわう彦根城内(和佐口多聞ヤグラ付近で)」のキャプション付きの写真も載った。だがこれを最後に、百年祭報道記事は、『朝日』紙面から消えてしまう。ただし、9月27日に始まった連載コラム「井伊大老/開国百年祭に寄せて」は、祭典終了後もつづき、その最終回は10月13日付紙面となった(全15回)。また、10月8日付『朝日』紙面には、「あぶない彦根城/修復工事は完成したけれど」「サクもない月見台/観光政策に批判の声」の見出し記事が載った。彦根城への入場者は、修復工事完了後の今年度上半期に600万人となり、この数値は昨年度比50%増という。「大老開国百年祭も手伝い、すっかり“観光株”が上がった感じ」と記事も浮かれ気分だ。しかし、「天守閣だけはりっぱだけれども、なぜ危険な場所を放って置くのだろうか」と片手落ちの観光政策に手きびしい批判を浴びせる観光客も多いようだ」と、観光誘客の勢いと観光施設の未整備とのずれが指摘されている。

京都で開かれた開国記念井伊大老百年展は、新聞報道によっていくらかその展示内容がわかったが、彦根の井伊大老開国百年祭における井伊大老展は、少なくとも『朝日』滋賀版をみるかぎりでは、その内容がわからない。井伊大老史実研究会が編集し、大老開国百年祭奉賛会が発行した『柳王余光』は(明記されていないが)その展示図録といってよい1冊なのだろう³⁷⁾。本書は和装、袋綴、帙入りの重厚な装丁である。1960年10月1日付の「まえがき」は井伊直愛による。

井伊大老ほど国史上毀譽褒貶の甚しい人は稀であるといわれます。明治維新史の政治的な傾向から、殊さらにゆがめられたことが考えられますが、私達はそれを指摘して云々するよりも、その人柄を偲ばせる数々の大老の調度品や、自作嗜好の遺品と共に、大老が遭遇した幕末の大事件の重要史料を、ほんの一部だけでも公刊することが何よりも雄弁に大老の真価を説明するものであると信じています。故事に「棺を蓋うて百年始めて事定る」といいますが、本年は大老逝いて方に百年目にあたります。新しい日本再建の秋にあたって郷土の生んだ開国の元勳の功績を賛えることは決して無意味ではないと思います。〔後略〕

「開国の元勳の功績」を讃えるという立場、史料を用いてそれをおこなうという手段、史観を批判しないという指針が冒頭に示されている(もっとも井伊大老開国百年祭式典挨拶では前述のとおり違ったのだが)、この姿勢のもとで本書に収載された品々や文書類には、39の番号がつけられている。本書本編は、まず「彦根屏風」の口絵がおかれて、

一 井伊大老肖像(油絵)東京都世田谷 豪徳寺蔵/大老四男 直安の筆/自らの記憶と大老側近者の追憶とを参考として描かれたもの

に始まる。これは直弼没後に描かれたということか。歴代彦根藩主のなかで、その肖像が油絵で描かれたのは、直弼ひとりだろう。図版のいくつかをあげると(表記は原文のとおり)、2.大老所用の具足、8.赤染

³⁷⁾井伊大老史実研究会の所在地は彦根市松原515となっている。これは井伊家別邸の千松館だろう。大老開国百年祭奉賛会は彦根市役所内。本書の滋賀大学附属図書館蔵本は彦根市役所からの寄贈。

七種蓋置³⁸⁾、13.金襴手燭台、袋形月芦雁金襴手水指、14.能面、18.和歌短冊、24.茶湯一会集、29.七五三居合秘伝書、とならべられた品々は、武、茶、歌、能をとおして、直弼の文武を示している。本書の構成は、文化人としての直弼を知らせる道具をまずならべ、だんだんと、幕末の直弼（あるいは井伊家）の知から、直弼（彦根藩）の政治へと展開してゆく。こうして見せ方のなかでは、17.為君祈世の和歌では、「国学を学んだ直弼は「国家の元々は朝廷なり」と常に皇室尊崇を怠らず「幕府は朝廷より委任を受けた責任政府である」との信念を堅持した」との解説により勤王の直弼が示され、18.の和歌「春あさみ 野中の清水氷みて / 底の心を 汲む人ぞ無き」によって、

国家百年の大計と信じて、全責任を負って締結した開国条約も、未だ時期尚早で世人は理解してくれない。しかしいづれ早春の雪がとけるごとく分つてくれるにちがいない。安政五年六月には開国の断行という大事を成し遂げ、懸案の將軍継嗣も決定し、朝廷よりは年末に御氷解の内意を得た。此の上は速やかに勇退して安楽の境地につくことを勧める家臣に、権力に恋々とするものでないが、前將軍家定の遺托と現將軍家茂の信頼に背くことが出来ない苦衷を述べ〔後略〕

た、と直弼の決意への推測がみせられるのだった。もとより、この歌には「開国条約」とも通商条約締結を「開国の断行」ととらえるとも詠まれてはいない。

30.オランダ風説書、嘉永五年版世界全図、31.オクタント、反射望遠鏡、32.紅毛書（ハルマ和解）シヨメル百科辞典、兵器製図、では、彦根藩がアメリカ艦隊来日情報をつかんだり、「藩をあげて洋学研究に力めた」りしたと説かれる。こうした防備と知の蓄積を背景に、33.別段存寄書下書によって、いよいよ「開国」をめぐる応答と判断が明らかにされる。ペリー来航後、幕府が「前例を破つて諸大名に諮問した」ところ、「三百年夷狄を敵視して来た国民感情としては攘夷論が圧倒的であつた中で、開国の当然を主張するもの極く稀であつた」、それが直弼だというのだ。このあたりの解説では、ペリーもハリスもともに、日本に「開国」を要求したと記されている。34.外国掛り老中への書翰、公用方秘録、では、後者の安政5年6月19日の条が載せられ、

勅許を得ざる中は調印延期を主張した大老も、遂に調印に踏みきり、外国奉行〔井上清直〕目付〔岩瀬忠震〕は米艦に調印のため急行した。幕議決定後帰邸した大老に城中の決定を聞いて「平常天朝を尊敬遊ばされる主君が勅許も降りない中に調印されるとは意外であり、反対派の術策に陥り違勅を攻撃されるに違いない」と慨嘆する公用人宇津木六之丞以下に対して述べた話の速記録である。

と解説される。だがこれまで（これ以後も）多くは、公用方秘録のこの6月19日条のくだりを、直弼の決意「勅許を待さる重罪八甘して我等吾人二受候決意二付、亦云ふ事勿かれとの御意」が参照されたり引用されたりしてきたのだが³⁹⁾、ここではそれが、直弼の心意ではなく家臣の心配の証左となっている。そして、開港場をどこするかをめぐっては、35.関白九条尚忠書翰、横浜開港の意見 により、

繁華な神奈川宿開港を主張する米国に対して大老は辺鄙な横浜村に港を開くことを主張した。〔中略〕大老は横浜も神奈川港の一部であつて、海水が深く、大船の出入の自由であり背後地が将来の発展に有利なことを

³⁸⁾ これは2008年彦根城博物館の「井伊直弼 大老への道のり」展（後述）でも「楽焼蓋置」として展示された。

³⁹⁾ たとえば、1953年東京の開国百年記念井伊大老展や、前掲吉田『井伊直弼』を参照。ただし公用方秘録自体の問題についていまはふれない（この点、母利美和『井伊直弼』幕末維新の個性6、吉川弘文館、2006年、を参照）。

主張して強引に押し切つて了つた。

と、横浜開港の恩人との賞賛が誤っていないことを明らかにする史料が提示されてはいる。ただし、転載された史料には、「横浜二いたし候様二与、君上（大老）より被仰出」とあるだけだ。水深や後背地のことは掲載された史料にはみえない。

安政の大獄については、37.梅田雲浜吟味申口、上使老中間部詮勝への書翰、の2点が載せられ、雲浜が「自白した真相」は、

水戸の斉昭（烈公）が我が子慶喜を將軍にする為に現在の幕府に反抗するのを利用して、之を扇動して江戸城攻撃、京都彦根の暴動にまで持ち込み、その騒に將軍家茂を廃し、京都にあつては孝明天皇を廃して粟田宮を樹立すると云う未曾有の暴力革命の計画は、当時日本人として天人共に許すべからざるものであつた。がゆえに、これが直弼に「遂に断獄の決意を与えた」と証され、彦根藩士宇津木から老中への書翰によって、

後世の安政の大獄と云われる処分も、開国条約を悪し様に政治の圏外の朝廷公卿にふき込んで幕府を窮地に追込み、家茂將軍を廃して水戸出身慶喜に代えようとする党利の為には国策も省みない隠謀にも、正面から敵罰主義で望むことは實際家である大老の真意ではなかつた。

と、現実へのやむをえない対応としての処罰であつたと説かれて、暴虐、非道な直弼という像の転換がはかられたのだつた。38.秘中要記、幕府押収の水戸文書、も直弼の所為は「反幕運動」「暴力革命運動」への対抗だつたこと、また、「勅命が卑しい諸大夫の手で如何ようにもなつたように思われる」ことをあらわす、「安政大獄の真相を物語る」あるいは「大獄の真相を解く」証左に活用されたのだつた。

最後の39.桜田殉難土遺品は、「敵の血のりて黒く錆び付いて物凄く血戦を偲ばせる」証拠品をあげることで、安政の大獄ではなくむしろ桜田門外の変こそが、非難をあびるべき悪逆だつたとみせるかのようである。ここに直弼自身の遺品はない。臣下を弔い、その追悼慰霊をすることこそが仁君のなすべきことと云うかのである。本書は、39に分けられた直弼ゆかりの品々と文書が載った紙上展示でもあり、最後に「井伊直弼年譜」で巻が閉じられることとなる。

1960年彦根の井伊大老展はこの『柳王余光』をみるかぎり、開国百年祭の一環としておこなわれた、東京、横浜、京都での展示と重なりあうところが多く、したがって、過去の展示を参照したうえで、直弼展の集大成あるいは白眉を目指していたと推察できる。京都の展示はいまのところその図録がみつからないが、ほかの東京にしても横浜にしても、どちらの図録もパンフレットでいどの体裁と内容だつた。『柳王余光』を展示図録とみてよとの仮定のうへだが、これは重厚な、そして荘厳なつくりを心掛けたとうかがえる大判（36.5cm×27.5cm）の1冊だ。文字数は少ないが、これも直弼の評伝となる。過去の遺物や史料が、「何よりも雄弁に大老の真価を説明」するとの立場による編集である。だがここでは、収載品や史料への解説もまた「雄弁に」直弼を語っている。本書は、その構成や史料やその解説が、直弼について語るときの1つの参照項となつてゆくのではないか⁴⁰⁾。その1つの例として、つぎにみる『朝日』紙上の連載がある。

40) つぎにみるシリーズ「井伊大老 / 開国百年祭に寄せて」の最終回「彦根史学の発展」(10.13)では、『柳王余光』は井伊家文書にもとづいた直弼評価をおこなう「彦根史学」の「中間報告」と位置づけられている。では『柳王余光』のその後の彦根史学の成果はなにになるのか。わたしはそれを知らない。

『朝日』のシリーズ「井伊大老 / 開国百年祭に寄せて」(9.27~10.13)をみてゆこう。全15回のタイトルをあげると、

桜田門外の変 / 暗殺に残る疑問 / 雨支度で行動にぶる、幕府のたそがれ / 勤王激しく弾圧 / 四天王のトップ“赤鬼”、くろぶね来たる / 率先して開国論 / 日本人の能力を信頼、総領事ハリス来日 / 幕府の“切り札” / 外交のヒノキ舞台へ、二つの決断 / 政変のきっかけ / 進歩派から集中攻撃、不平等条約 / 国内法には無知 / “事なかれ主義”も働く、安政の大獄 / 今の破防法適用 / “倒幕”の首謀者を弾圧、側近と情報組織 / 京都常駐の主膳 / 警視總監格で大活躍、「尊皇攘夷論」の変化 / 最初は国防理論 / 安政の大獄で倒幕へ、幕府崩壊へ / 各地で農民一キ / 尊皇派は組織的テロ、埋もれた青春 / 絶えず監視の目 / 苦しかった“部屋住み”、一期一会の境地 / 若き日に無常感 / 禅の道に人生観築く、藩領で示した善政 / 町人迎えて談笑 / 赤線廃止も手がける、歴史的な評価 / “もともと保守家” / まず公平な福地の解説、彦根史学の発展 / 守り伝えた史料 / めざましい最近の活躍

となる。この連載 ~ の挿絵は、彦根在住の日本画家浅野伝一が、「会社社長矢部寛一氏の援助で約八年前から、大老の正しい姿を紹介しようと描いてきたもの」で、記者によって「埋もれた史実を掘り起こし、時代考証などの研究を重ねた苦心作」と評価された60点あまりの一部という。「大老の幼少から桜田門に倒れるまでの生涯が〔中略〕絵物語りとして、いきいきとつづられている」これらの絵は、「大老百年祭記念に近く個展を開く計画が進められている」ともいう。連載には、世田谷豪徳寺にある直弼の子直安が「自分と側近の記憶をつき合わせて描いた油絵」が載り、最終回は、「井伊家文書の中の重要史料「公用方秘録」の写真となる。油絵とその解説、そして公用方秘録の写真も、『柳王余光』からの借用だろう。

(9.27)には連載趣旨となる文章がある。そこでは、直弼を「鎖国という“たれ幕”をあげ放ち、日本に開化の光を注ぎ入れた決断の人」と讃え、そういえるようになったのも、「大老への評価は時代とともに変わった」からで、「国賊説から“花の生涯”まで、死後100年間に大きくゆれ動いた評価の中には、明治維新史の裏側をひもとくカギもひそんでいよう」との展望も明かす。この連載では、「最近の維新史の研究や、彦根市に保存されている井伊家文書などをよりどころに“幕末の首相”井伊直弼の人間と、それを取り巻く歴史の渦を描いて見よう」というのである。その第1回が「桜田門外の変」直弼の最期から連載が始められた。直弼の死の代名詞となっている桜田門外の変は、「戦前の見方」では、「天皇のお許しを待たずに開国の条約を結んだため、勤皇派の水戸浪士が立ち上がった」となっていたが、それが、

「もし赤鬼(井伊大老)へ一発切りこめば水戸の徳川斉昭の子供、慶喜を将軍にする勅令をあっせんしてやる」という公卿の家来から水戸藩士への密書が今なお井伊家に資料として保存されている。“勤王”側にも義拳というには割り切れない複雑な動機があった。

と史料を根拠とした事変観の転換を述べる。さらに、「しかし問題はそんな小さなことにとどまらない。大老はなぜ殺されねばならなかったか」という疑問には幕末の歴史を集約する一切がこもっているのだ」とみせられた見通しは、「暗殺に残る疑問」というリードともつながっている。だが、それへの解はここに示されていない。

直弼を暗殺した勤王の水戸浪士たち。直弼が「水戸の斉昭を罰したり、勤王家をビシビシ弾圧した」のは、「幕府の慣習法に照らすと当然の処置と考えたから」と記事はみせる(9.28)。改革に失敗した幕府は、たとえば、すでに「たそがれ時」、いいかえると「やがてはガラガラとくずれ落ち、新しい異質の力

にとって代わられる直前」だった、その新勢力が改革に成功した薩長土肥で、「これらの藩がのちに幕政批判の実力者に成長してくるのも自然のなりゆきだった」と、幕府倒壊の必然と直弼による弾圧の当然とがならべて示される。一方、ペリー来航への直弼の対応はというと、彼の主張するところは「当時としては論旨の通った開国論といえよう」と評価され、「政治的な立場は保守である彼が、対外問題ではだれより先んじて開国和親にふみ切った」と大老就任まえの直弼がとらえられたのである（ 9.29）。

ペリー来航後の和親条約締結により、「もはや幕府の伝統的な鎖国政策は事実上破られ」た。ついでハリスの通商条約締結の要求となる。こうした政局にあたった人物が列挙され、その値踏みがあらわされる（ 9.30）。阿部正弘、「のっぺりとした貴公子」「包容力が豊かで西洋に通じた下級官吏を登用」「はっきりした政策を打ち出すのでもなく」「幕府の責任政治の建て前をくずし」た。堀田正睦、「開国主義者」「ブ男で、やぼったく」「政治的に失脚する危険が多い」。松平慶永、「反主流派の巨頭」「はじめ条件つき開国論者として登場」「井伊派とは正面衝突」。島津斉彬、「外様大名の中心人物」「進歩的な意見の持ち主」。徳川斉昭は、

戦前の評価から、これくらい相場の下がった人も少ない。開国論に対する彼のジョウイ論は、時世と国情を
考えない硬論だったようだ。本心は子の慶喜を将軍につけ、幕政の実権をにぎりたかったのだろう。

とその評価は厳しい。そして、直弼はというと、

いまや阿部、堀田連立内閣の中で、彼は主流派の“実力者”である。家格からいっても、譜代大名の中でも
っとも高い。その上“井伊機関”ともいべき秘密情報組織を持ち、反幕府勢力に実力行使をする準備もし
ている。

と、斉昭の「相場」が下がった分、直弼のそれが上がるということか。「秘密情報組織」などをもつことすら高評の材料となったようだ。ここでも、開国論での進歩性と将軍継嗣と幕政改革での保守性とをあわせもつ「矛盾した」人物として、しかし「最後の“切り札”」として直弼の登場をあらわしている。

勤王の水戸との対抗は、幕府の慣習法や家康の祖法をもちだして説明ができようが、勅許なしの条約調印をめぐる天皇との問題は、やや慎重な議論が必要となる。これについては、直弼は「国賊」ではなく「精神的な尊皇家」だったと、孝明天皇への書物の献上をその証左としてみせ、幕府の責任の自覚と、「植民地になる恥」「国体を恥ずかしめる」ことを避けるための条約調印断行だったと解説されるのだった（ 10.1）。これは、「公用方秘録」（のおそらく安政5年6月19日）の記述などをふまえた理解となっている。直弼の条約調印と将軍継嗣をめぐるこの「二つの決断」が、しかし、「政変のきっかけ」となってしまう。直弼は、「若いころからの勉強で、海外事情にくわしかったといわれているが、それは断片的なニュースだけで、国際法にはまるっきり無知だった」、それが不平等条約の締結につながり、「横浜を開港した先見の明が正しい伝えられているが、これも東海道筋から遠い横浜を選んで、妙なマサツを避けようとした“事なかれ主義”が働いていたようだ」と、ここでは、直弼の知識や判断についての評価が厳しい（ 10.2）。

だが、越前、水戸、薩摩といった「井伊打倒」の団を「反幕勢力」と記事はみなし、これへの弾圧が「有名な安政の大獄」だという。この「弾圧」も、さきの秘密情報組織の機能があげたてられて、かつ「いまでいうと“破防法”を適用したわけだ」と納得され、「戦時中の特高警察みたいに、ひどいことはしなかったらしい」「断罪は各藩の家老あたりで止める方針にしたらしい」、つまり「皇族、公家、諸大名まで〔追及の〕網をひろげるのには恐ろしく慎重だった」と、いくつもの推測をまじえながら、安政の大獄の、ひ

いては直弼の所為への非難はしない(10.4) とはいえ、「水戸藩への風当たりは強く〔中略〕のちに大老暗殺が水戸の浪士たちによって計画されるのも、いじめ抜かれた仕返しと考えると、偶然ではなかった」と、安政の大獄と桜田門外の変が直截につながられてしまう。

直弼から目を転じて、その「側近と情報組織」が議論される。安政の大獄は「ほとんど彼の指導によるといわれる」彼とは長野主膳である(10.5) さきにその機能を評価するような論調だった記事もここでは、

一見進歩的な開国方針は、秘密警察と強硬弾圧で反対者を圧倒して進められた。この方針から次の時代を指し示す明るい光は、ついに生まれなかったのである。

と、前出のこの連載記事の表現を借りれば、直弼もまた「たそがれ」ていたこととなる。「大老の死後」も示され、側近たちは「非運」のうちに「葬り去られた」こと、「大老の遺志を継いだ重臣は一人もなかった」こと、幕府も直弼の「強硬方針を捨てた」ことをもって、時代の転換、つまりは「倒幕」の趨勢が得心される。そのうえで記事は読者に、「直弼の孤独」を味わってみる必要があるのではなからうか」と勧める。安政の大獄後の倒幕の趨勢は、しかし、「既成勢力」から「全国志士連合」にその主導権を移し、攘夷の放棄が自覚されるようになるという(10.6)。

幕府を倒した明治政府が対外方針にとり上げたのは、“鎖国”でも“じょうい”でもなく、“開国和親”つまり“井伊路線”だった。一見矛盾しているように見えながら、安政の開国と明治の開国は、その間に以上のような国内再編成のアラシを経験した異質のものであった。

前出の連載第1回に掲げられた議論の展望として述べられた、「明治維新史の裏側をもひもとくカギ」は、ここにつながるのかもしれない。

そして幕府は崩壊する。その最後にちかいところ、桜田門外の変の2か月まえのこととして、日米修好通商条約批准のために咸臨丸で渡米した一行のことが書かれる(10.7) そこには、勝海舟や福沢諭吉など「次の世代に活躍した人が多かったことを思うと、新しい文明にはじめてふれた意義は大きかった。大老がまいた“一粒の麦”が思わぬところで開花したわけだ」と、これは井伊大老開国百年祭を挙げる根拠と意義 それ直弼の顕彰にもつながる にかかわる記事となっている。

連載のなかの幕末史を終えたところで、直弼の「埋もれた青春」が記され(10.8) また「一期一会の境地」もあらわされる(10.9) このように直弼のひととなりや、いわゆる「文化人」の側面がたどられて、「政治家として世に出たときは、純粋な教養人になり過ぎていたのではあるまいか。悲劇の人となる原因はここにもひそんでいたようだ」と臆断されてしまう。

転じて、「開国」にはそうかわらない、しかし直弼評価にとって重要となる、藩領での政治も示される(10.11)。「彦根にあって内政をやったのは正味三年ほど」、そのかん「領内のすみずみまでワラジがけで歩き、実情をつぶさに見て歩いた」こと、いま(記事の当時)でいう「赤線廃止も手がけ」たこと、湖北での護岸工法などが「善政」として、この記事に記録されている。そこで、つぎのとおり、藩領での直弼の評判が理解される。

わずかの内政期間に広い範囲の仕事をこなしたのはさすがで、“名君よ”と民が慕ったのもうなづける。戦後まで直弼が“わるもの”呼ばわりされたことに彦根の人たちが無念の思いをしたのも無理はない。内政面ではたしかに善政をほどこした藩主だったのだから。

というわけだ。

井伊大老開国百年祭が彦根で挙行された1960年に至る時期には、その前年1959年に東京大学史料編纂所の編集で「大日本維新史料 類纂之部 井伊家史料」の刊行が始まり（東京大学出版会）、その前年1958年には前述のとおり直弼銅像の護国神社からの移転と『開国の偉人 井伊直弼』の刊行があった。1953年と1954年には東京と横浜で直弼を主題とした展示が開催され、1954年には横浜で、1949年には彦根で直弼銅像が竣工した。1940年代末から1950年代にかけては、たくさんの直弼関係の著作が刊行され、それは1948年に彦根で発足した井伊大老史実研究会の活動とも重なっている。同会は翌1949年から井伊家文書の整理を始めていた（『朝日』49.6.19）。さらに溯れば、1940年の井伊大老八十周年記念祭挙行と直弼についての書籍の刊行、1941年、1942年から展開した直弼にかかわる教科書問題があった。1960年は、こうした多様な形態でおこなわれた直弼顕彰の集約と達成の時期になったといえよう。

1960年には京都と彦根で、大老と開国の名称を掲げた百年記念行事がおこなわれ、直弼と開国についてとても多くの言葉が噴出した。他方で、彦根上天守閣の復元、佐和口多聞櫓の復元と開国記念館の竣工といった建造物をとおした記念事業もおこなわれ、多くの人びとに井伊大老開国百年祭の1960年が特別な年だと知らしめたのだった。

ここでもういちど、1960年の『朝日』滋賀版をみよう。「開港の恩人「井伊大老百年祭」がこの秋、彦根で行なわれる」にさきだって、1909年横浜での直弼銅像除幕式で親しくなった「老外人と日本の学徒」とのあいだで交わされた文通の痕跡（手紙を翻訳した文書）が見つかったというのだ（「井伊大老に関係の / 民間外交文書を発見 / 五個荘東校長 百年祭前に大喜び」3.22）。「民間外交文書を発見」とは大仰な見出しではあるが、その若い学徒がのちに校長を務めた五個荘東小学校の現校長は、「この外人を感嘆させた井伊大老という人が、いかに国家的に貢献された人であったかということが推察される」との談話が紙面に載っている。「開港当時を知る」このアメリカ人の書簡訳文の発見が、直弼を評価するにふさわしい領域としての「国家的」な場を想起させたのである。「海外」ということであれば、彦根市は「海外移住者を多く出している」ので、その移住者に井伊大老開国百年祭の事業費募金を呼びかけたところ、募金者総数475人から総額およそ150万円が送られてきた（「海外から百五十万円 / 彦根 大老百年祭に寄付」7.20）。シカゴやトロントでは「大老百年祭後援会」もできたという。彦根市はこうした

募金熱の高い原因は、故郷が生んだ井伊大老の徳をしのぶとともに、日米修好百年目だけに、肩身の広い思いをしているからだろう

とみている。「国家的に貢献」した人物であればこそ、直弼の「徳」が海外にも届き、それに呼応する募金が寄せられ、それを彦根市も喜んだということだ。1960年の井伊大老開国百年祭会場は彦根市内の各所だが、それに賛同する人びとは広く海外にもいて、それは直弼自身の偉勲　ここでは正確には、直弼の銅像によって表現されたその顕彰、となる　その流通範囲が日本人にとどまっていなかったこととつながる、と示されたのだった。

百年祭にさきがけておこなわれた、「井伊大老の霊を慰める二つの催し」を伝える記事がある（「井伊大老たたえて / 彦根市で二つの催し」3.29）。それは3月28日のこと、この日は「百年前、徳川幕府が桜田門外での大老の殉難を発表した日」である。1つは法要。直弼の「遺品などを納めた供養塔のある里根町天寧寺」で百一回忌法要がおこなわれた。天寧寺では法要を毎年おこなっているなかで、「ことしは満百年に

当たるので、大老の曾孫になる井伊彦根市長もお参りした」と、供養塔に参拝する市長の写真付きの記事が法要のようすを伝える。もう1つは記念講演会。滋賀県教育会が主催した「井伊大老顕彰記念会」が、彦根映劇で開かれ、およそ500人が集った。講演者は、京都大学名誉教授の中村直勝。

大老の功績をかずかず語り、「大老が勲命にそむいて開国条約を結んだ偉業は日本の歴史にサン然と輝いている。開国の決断は彦根藩が大老を信頼していたからこそ出来たわけで、もし、藩の人たちが大老を信頼していなかったら大老はあれだけのことは出来なかったはずだ」と語った。

新聞報道をみるかぎり、この百年祭の日程が10月1日から5日までと設定された経緯の説明はなかった。百年祭の公式行事に組み入れられていないのだが、3月28日におこなわれた法要のみならず講演会にも慰霊の意味が認められた。

日米修好通商条約批准、桜田門外での直弼暗殺の年だった1860年から百年のこのとき、直弼大老在任中に締結された条約により「開国」が実現し、それを直弼の功績とする見方がここにはっきりと確定され定着することとなったのである。

彦根で直弼銅像が再建されたとき⁴¹⁾、「日米親善の先駆者」(「大老像完成」49.11.9)、「開国の先覚」(「しのぶ」開国の先覚 / 井伊大老銅像除幕式 49.11.12)とあらわされ、直弼が「非業の最期をとげて今年は八十八年目に当る」とときには「維新開国の雄」(「映画化される“井伊大老” / 八十八周年記念に銅像も再建」48.10.29)と想起され、「大老の開国事業に因んで「開国館」の建設を計画中」(「愛国者井伊大老 / 積極的な顕彰運動開始」41.8.15)だったり、没後八十周年祭典のときに歌われた井伊大老頌徳歌に「断」の一字に開国の、国是定めし井伊直弼」(「頌徳歌高らかに / 井伊大老記念式厳か」40.4.11)と記されていたりと、1960年以前にも直弼が顕彰されるときに、「開国」が彼の功績としてあらわされたことがあった。それらは、直弼の死没や生誕を記念するときにくりかえし引き出された直弼の遺業だった。1948年(たとえば彦根での井伊大老史実研究会の発足)と1949年(たとえば彦根での直弼銅像再建)におこなわれた直弼顕彰事業を、日米修好通商記念と銘打ってもよさそうなのに、そうした表現は、いまのところみつからない。おそらく、横浜での開国百年祭と開港百年祭を観察したうえでのことなのだろう、1960年に、没後百年と日米修好百年とを重ねあわせて、「開国の」という形容詞がつく偉人、英雄、英傑として直弼を顕彰し想起することが公認されたのだ。

この事態を視察し確認する権威として、高松宮がいた。式典への彼の出席は「彦根市で一日から催された大老開国百年祭に高松宮が出席された。戦前ならこんなことは起こりようがなかった」(「井伊大老 / 開国百年祭に寄せて」、60.10.12)。高松宮は直弼の顕彰を現場で確認する、最初の皇族となった。彼は11月1日の式典で、

今日の日本の運命を明かるく開いたとも申すべき、井伊大老の偉績をしのぶ百年祭がこゝに行われるに当たりまして、私達お招きを受けまして、その郷里の彦根のゆかりの地に参りまして、追悼の言葉を捧げることができることを心うれしく存ずるものでございます。

と述べていた(「高松宮殿下おことば」『広報ひこね』60.11.20)。至尊の、とまではいかないにしても大いなる権威が直弼顕彰の場においてそれを視認する、それを目撃する多くの人びとによって、直弼の顕彰が確か

41) このとき銅像除幕式は11月10日の大老生誕祭におこなわれる予定となった(「鑄造にかゝつた / 井伊さんの銅像」49.9.15)。

なもの認められるのである。

本章では、開国、開港、直弼にかかわる、1954年、1958年、1960年に横浜、彦根、京都でおこなわれた5様の百年祭をみた。こうした複数の百年祭すべてにおいて、直弼がその主題の1つとなり、いずれにおいても直弼が開いた事績の顕彰がおこなわれた。史料の残りぐあいにもよるが、直弼の生地でもなく生前に彼が立ったこともない地である横浜での、いわば濃い顕彰がはっきりとあらわれ⁴²⁾、それに照らせば直弼の郷里彦根では、直弼を記念する行事を挙げる機会がくりかえしあるなかで、ようやく1960年になって、おもいきり直弼を取りあげられたようにみえる。個々の祭典や展示には偏差があるが、1954年～1960年には全体として⁴³⁾、直弼を「開国」とのかかわりで顕彰していた。それは、彦根でも横浜でも同じだった。それぞれの場所で、直弼は「開国」の歴史のなかに位置づけられた、いや、直弼がそのなかに位置するにふさわしい「開国」の歴史が創出された、といわなくてはならないのだ。

小さな葉が集ってひとまとまりの葉になるように、それぞれの事業が関連しあって直弼の顕彰となる。

2008年の現在

1858年から数えて150年めとなる今年2008年は、その150年まえの出来事である日米修好通商条約締結を記念した展示や行事がおこなわれている。それらは、開国や開港をどのように想起しているのか、そこで直弼はどのように位置づけられているのか、を記録しておこう。

1. 横浜開港資料館(2008年4月23日～7月27日) 横浜開港資料館では、「開港150プレリユード」として「ハリスと横浜」と題した展示がおこなわれた。この展示は、「今年〔2008年〕は、幕府がアメリカをはじめとする欧米5ヶ国と通商条約を締結してから、ちょうど150年を迎える」ので、それを記念しての企画展となっている。「各国に先駆けて締結されたのは日米修好通商条約」で、「この通商条約に則って、翌1859年7月1日(安政6年6月2日)に横浜は開港し、その後、貿易都市としてめざましい発展をとげていきました」と横浜開港の所以とその後が示され、「本展示では、通商条約締結のアメリカ側の立役者であるハリスを中心に〔中略〕港都、横浜が誕生するまでの道程を紹介します」との展示案内がある(展示ピラ)。なお、このピラといくらか異なるもののほぼ同じ記述が、『開港のひろば』(横浜開港資料館報第100号、横浜開港資料館編集・発行、2008年4月23日)の1ページにも掲載され、ここでは、「〔日

⁴²⁾2008年5月にウェブ上で「二つの百年祭」関係の公文書(『市史通信』第1号、横浜市史資料室、2008年3月29日)に接し、1954年の開国百年祭と1958年の開港百年祭の公文書が複数の簿冊になって保管されていると知った。そこには「井伊掃部頭銅像関係」の文書もあるという。「これらの文書は紙質の良くない時代のもので、破損のあるものもあり、来年度以降、複製を作成し、それを閲覧に供する予定である」と案内されていたので、同年6月に現在これらの文書は閲覧可能か(閲覧不可とは書かれていない)私費でマイクロフィルム撮影は可能かを尋ねたところ、閲覧不可、私費の全冊撮影は不可、閲覧用複製の作成時期は未定、との返答があった。所在が公表された史料の閲覧ができなかったりその複製作成時期がわからなかったりするの、行政の措置としてとてもおかしく感じる。史料保全を優先することもとてもよくわかるが、そのうえで、複製による速やかな公開をもとめる。

⁴³⁾東京での開国百年記念井伊大老展も含めれば1953年以降のこととなる。それ以前の、少なくとも彦根をみれば、この時期はもっと溯れることだろう。

米修好通商] 条約文には、「神奈川」と記されていましたが、実際には横浜が開港場となりました」と横浜開港の経緯が説明されている。

この展示構成は、(1)ハリスの来日、(2)日米修好通商条約の調印、(3)ライバル、イギリス使節の来日、(4)オランダ・ロシア・フランスとの通商条約調印、(5)2つの開港場 - 神奈川と横浜、(6)開港場横浜の誕生、(7)駐日公使、ハリスとオールコック、(8)ハリスの退場、(9)遣米使節の派遣 - 批准書交換、(10)各国外交使節の滞在記・回想録、となっている。2009年に開港150年をむかえる横浜市が、それへのプレリユードとして横浜開港に至る歴史を、それを規定した最初の条約締結国の交渉担当者ハリスを主役として、ほかの4箇国の動向も添えて展示するというのである。配布された「展示史料目録」にはまず、「ハリス登城の図」がおかれ、「大正7年4月15日米国特命全権公使ハリス建碑記念写真」⁴⁴⁾と「ハリスの墓」の写真などがあり、そして最後は、「ハリス略年譜」〔ハリス饗応の膳の献立〕再現料理の写真で締めくくられている。

前出のとおり、横浜開港は通商条約締結からただちに実施された事業ではなく、条約条文にある「神奈川」ではなく横浜を開港場とするための交渉が必要だった。それが展示コーナー「2つの開港場 - 神奈川と横浜」で示され、ここでは、外交交渉にあたったひとりの幕臣が注目されている。岩瀬忠震である。彼については、「イギリス使節が高く評価した岩瀬忠震」として彼を含めた「日英修好通商条約談判の日本側委員の写真」と、「岩瀬忠震の肖像」⁴⁵⁾が展示されていた。前者のキャプションは、「横浜開港を主唱した岩瀬の写真は、これが唯一のもの」、後者については、「積極的な開港論を展開した。この主張が横浜開港案を前進させた。安政の大獄で失脚し、61(文久1)年、病没した」と書かれている。「2つの開港場」につづく展示が、「開港場横浜の誕生」となる。忠震についての評価とは、展示でも示されたとおり、

肥後〔肥後守忠震のこと〕は一行の中の才人だった。〔中略〕業務上の問題についての彼の観測はいつでも鋭く、正鵠を射ていた。彼はそれを行なうに当っては、いつも謙遜だった。

である⁴⁶⁾。イギリス公使により才人と評価された幕臣が横浜開港の「主唱」者だったと展示されたのである。だが、唯一のというせっかくの写真も、忠震の顔はぼやけてしまい、彼の相貌をそこからうかがい知ることはできない。

さて、この展示では「ハリス略年譜」が掲示されている。そこには、安政5年6月に、「彦根藩主井伊直弼(いゝ・なおすけ)大老に就任」とみえる。しかも、ラインマーカーが引かれてほかの事項よりも目立つようになっている。とはいえ、「開港150プレリユード ハリスと横浜」の展示で、直弼の名はここ1箇所に記されているだけだった。「ハリスと横浜」と題され、「港都、横浜が誕生するまでの道程を紹介する」と掲げられた(当然その過程には開港がある)展示で、「開国」の語を用いず、それを解説することも無く、そして直弼にほとんど言及することもなく可能となる展示の様式が公開されたのだった。

2. 江戸東京博物館(4月26日~6月22日) 江戸東京博物館では、開館15周年記念として特別展

⁴⁴⁾この展示キャプションは「神奈川町の旧家中村家の発案で、ハリス記念碑を日米親善のため高島山に建設することが決まった。写真は本覚寺で催された起工式の記念写真。〔中略〕記念碑が実際に建立されたかは不明」となっている。撮影場となった本覚寺はかつてアメリカ領事館として用いられた。

⁴⁵⁾この肖像画は展示史料目録にもかんたんに示されているとおり、渡辺修二郎『阿部正弘事蹟』上巻(渡辺修二郎、1910年)に収載された土屋秀禾による画で、現在に残る忠震の肖像画はこれのみとおもわれる。

⁴⁶⁾岡田章雄訳『エルギン卿遣日使節録』(新異国叢書9、雄松堂書店、1968年、146ページ)

「ペリー&ハリス - 泰平の眠りを覚ました男たち」が開かれた。しかも2008年は館にとって記念となる年にとどまらず、さきに横浜開港資料館があらわした記念の仕方をこの館も掲げ、「2008年(平成20)は、1858年(安政5)に日米修好通商条約が結ばれてから150年にあたります。ここから日本とアメリカは本格的な通商を開始しました」と特別展ピラを書き起こしている。

ペリー来航に始まり、日米和親条約の締結、そして日米修好通商条約に至る一連の推移は、近代日本を方向づけた日本史上の大事件でした。ペリーは黒船を率いて鎖国日本の扉を開きました。続いて総領事として日本を訪れたハリスは、孤軍奮闘しながら通商交流の道を開きました。しかしその実現には、近代という新しい時代を見すえて彼らと向き合った江戸幕府の果敢な外交があったのです。

と、ピラでは「日米両国の交流の歴史を紹介」と案内されていた。展示の英文副題は、「THE DAWN OF U.S.-JAPAN RELATIONS」となっていた。ペリー来航から日米通商条約締結までを「一連」ととらえ、それを「近代日本を方向づけた日本史上の大事件」と位置づけ、それはペリーとハリス、そして幕府の有能な役人による努力と決断によると評価する。ペリーは「鎖国日本の扉」を、ハリスは「通商交流の道」をそれぞれ、開いた、とみせる展示となるというのだ。『江戸東京博物館 NEWS』vol.61(江戸東京博物館編集・発行、2008年3月31日)により、この特別展の紹介をみよう。展示構成は、序章「黒船前夜 - 米国と日本の出会い」、第1章「ペリーの来航から日米和親条約の締結へ」、第2章「日米の響応と交歓」、第3章「ハイネの見た日本」、第4章「日米修好通商条約」、終章「遣米使節の見たアメリカ」となっている。ここでもさきのピラと同様に、「開国」も「開港」もその語が使われていない。それらを使わずに、ペリーとハリス、あるいは、日米和親条約も日米修好通商条約も記述したり展示したりできるということなのだ。

この展示では、ペリーによる日米和親条約やハリスによる日米修好通商条約が締結されたことで、なにが、どう変わったか、をあらわすよりは、「当時の日本人が持っていた黒船に対する好奇心、黒船に対するイメージ」をみせ、「日米双方の贈答品を両国が所蔵するコレクションから展観」したり、「幕府との交渉過程や〔ハリスの〕江戸城登城までの経緯、ハリスの下田や江戸での事績をたど」ったりすることに主眼がおかれたようにみえる。ただし、「横浜開港場の選定(「下田御用留」より)」「御開港横浜之全図」「再改横浜風景」といった、開港場のようすをあらわす展示物もあるが。

展示会場のパネルには、第1章では、「そして3月3日(洋暦3月31日)横浜で日米和親条約が結ばれ、ついに日本の扉は開かれた」と、第4章では、「その〔ハリスの〕目的はペリーが果たせなかった日本との通商条約を結ぶことであった。条約交渉には、ハリスの応接役でハリスが友と呼んだ下田奉行井上清直と海防掛目付岩瀬忠震の2人の全権委員があたった」と書かれている。前出の同館刊行物の特別展紹介にも、

江戸への出府と将軍への謁見を経て開始された条約交渉は、井上清直と岩瀬忠震という二人の幕臣が担当しました。井上は下田滞在当初からハリスの応接にあたり、ハリスが友と呼ぶほどの信頼関係を築きました。

両者の折衝の末、一八五八年七月二九日(安政五年六月一九日)に日米修好通商条約が締結されます。

と記されているのだから、条約締結にむけてのこの両名のはたらきは高く評価され、ペリーとハリスを展示するにあたって、また、日米関係の黎明期の歴史をあらわすにさいして、彼らが不可欠な人物ととらえられているのである(この展示紹介に登場する日本人は3名のみ)。ここで、横浜開港資料館の展示でも重視されていた忠震についてみるとしよう。

ペリー&ハリス展でもさきのハリスと横浜展と同じく、「西応寺で撮影された幕府の条約交渉団」として忠震たちの写真が展示されている。「井上と岩瀬は肖像がほとんど伝わっておらず、これは貴重な写真である」(展示キャプション)。忠震をあらわす文書史料は、1つが「横浜開港場の選定」(安政5年8月)もう1つが「中根雪江宛岩瀬忠震書簡」(1858年6月11日)である。前者については、

日米修好通商条約では、開港場の一つを神奈川に置くとされたが、幕府は神奈川宿から離れた横浜を選定した。これをすすめたのは、当時外国奉行となっていた岩瀬と水野忠徳であった。彼らは、条約締結後ただちに横浜の調査にあたった。ハリスは当初この案に反発したが、幕府はハリスが香港旅行中に横浜港の整備を進め、彼が戻ってきた時には一寒村だった横浜が立派な開港場のたたずまいとなっていた。

と解説されている。後者では忠震が活動した時期の概要も説明され、

岩瀬はこの書簡で、井伊大老と老中との対立の状況など閣内の微妙な情勢を伝え、自身の左遷の可能性も感じている。岩瀬は、日米修好通商条約を皮切りに5か国との条約調印を終えた9月5日、突然作事奉行に左遷され、翌安政6年8月27日に永蟄居に処せられた。そして文久元年(1861)、不遇のうちに44歳で死去した。

とその末期も示されている⁴⁷⁾。

展示会場では条約交渉にあたった幕臣について、ていねいに説明されている。「ハリスと向き合った幕臣たち」というパネルでは、

有能な幕臣が任にあたった。なかでも岩瀬忠震は積極的開国派の旗手で、阿部正弘の後を継いで開国推進を基本設計とする老中堀田正睦のもと、幕府外交をリードした。岩瀬は日米修好通商条約交渉の全権委員としてハリスと向き合い、困難を乗り越え条約締結を実現した。横浜開港場の設置も、岩瀬らの提案によるものである。

こうして日米修好通商条約締結150年のときに、条約締結と横浜開港を遂行した幕府の能吏が顕彰されるのだった。岩瀬の略伝を記したパネルもある。

岩瀬忠震(1818-1861) / 旗本設楽家の出身。幕臣きっての俊才として知られ、嘉永7年(1854)海防掛目付に抜擢された。日露追加条約の交渉・調印を行い、続いて日米修好通商条約の全権委員となり調印を果たした。安政の大獄に関わり処分を受け、不遇のうちに44歳で死去した。

さきの図録にはなかった情報として、永蟄居の処分は安政の大獄の一環だったことが示されている。ここに、忠震と直弼がつながる。しかし、直弼については、このペリー&ハリス展ではほとんど取りあげられていない。展示会場の年表をみると、忠震については、「関連事項」の欄に、全権委員就任、上洛、永蟄居、44歳没、と複数のことがらがあがっているが、直弼については、「その他の事項」にただ1つ「井伊直弼大老に就任」とあるだけだった。展示会場に接したミュージアム・ショップでは、忠震を主題とした、設楽原歴史資料館資料研究委員会編『岩瀬忠震』設楽原歴史資料館第2集(新城市教育委員会、発行年不詳)と新城市設楽原歴史資料館編『設楽原ゆかりの外交官 開国の星 岩瀬忠震』(新城市設楽原歴史資料館、2004年)の2冊も販売されていた(表紙しかみなかったので改訂版がおかれていた可能性もある)。直弼については、ここでも1冊もない。

⁴⁷⁾ 東京都江戸東京博物館編『特別展 ペリー&ハリス - 泰平の眠りを覚ました男たち』(東京都江戸東京博物館ほか、2008年、順に144、142ページ)。

1854年にペリーが日米和親条約を締結した、ハリスが日米修好通商条約の締結をおこなったのは1858年のことだった、というとき、どちらにもほとんど解釈の入り込む余地はなく、条約締結年 - 締結担当者 - 締結条約名をならべた1文にすぎない。ここに、「開国」や「開港」といった動詞とその目的語が一体となった熟語をおこうとすると、まず、開くとは「なに」をなのか、その「なに」が国や港となると、それらをどのようにすることが「開く」こととなるのか、が問われてしまう。ではまた、「開国」はだれがもとめ、だれがおこなったのか、となるのか。多くの歴史教科書に、ペリーが開国をせまった、もとめた、と記されている。だが、ペリーが持参した国書の主体、アメリカ大統領フィルモアが開国を要求した、とあらず教科書は1つも無い。ではなぜ、日米修好通商条約をめぐる、高校日本史教科書でも、それを結んだのが直弼だったり忠震（代表として）だったりするのか。

江戸東京博物館のペリー&ハリス展は、こうした問いをうまく回避して、その展示をおこなったのだ。これは前巻をふまえた1つの成果といえるかもしれない。

3. 彦根城博物館（5月23日～6月24日。巻の1） 冒頭でみたとおり、2008年6月の時点で、彦根では井伊直弼と開国150年祭が開催されている。2008年5月28日に開設された「井伊直弼と開国150年祭公式サイト」(<http://www.hikone-150th.jp/>)の「150年祭について」のページから、まず、祭典の「開催趣旨」をみておこう。

井伊直弼は、1815年11月29日（文化12年10月29日）彦根井伊家の下屋敷機御殿で、彦根藩11代藩主直中の14男として生まれました。その後、父直中の死により17歳で慣れ親しんだ機御殿から、後に自ら「埋木舎」と名づける彦根城内の一隅北の御屋敷に移り、彦根藩の世子、兄直亮の養子となる32歳までの16年間、経済的にも精神的にも不遇な日々を過ごしています。/直亮の死去により1850年2月24日（嘉永3年11月21日）彦根藩主に、1858年6月4日（安政5年4月23日）には大老就任、そして、1858年7月29日（安政5年6月19日）に日米修好通商条約を締結しています。/2008年（平成20年）は、その条約締結から150年目にあたります。/この記念すべき日米修好通商条約締結150周年を期して、日本を開国に導き、開港により諸外国との交易・交流の門戸を開いた、彦根藩主井伊直弼という人物を再評価し、また、政治の表舞台だけでなく、文化人としての側面や生いたちを紹介するなど、新たな直弼像を彦根から発信します。

となる。開国を日米通修好通商条約締結と同義とするらえ方は、彦根市にとってすでに、1960年にわがものとしていた歴史の記念方法だった。ただしここでは、直弼の事績を、日本を開国に導いたことと、開港により諸外国との交易・交流の門戸を開いたこと、とに区分している。「開港」の語を開催趣旨に入れた理由は、つぎにみるとおり、おそらく、「ゆかりの地域」との連携や交流を「事業の基本的な考え方」にあげていたため、「開国」ではそのゆかりの地域が茫漠とってしまうが（開かれたのは日本のはずなのだから）「開港」とすればどこをゆかりの地域とするかはっきりとする。それは、横浜だ⁴⁸⁾。

「事業の基本的な考え方」は、

1. 機御殿での誕生から、桜田門外で花と散るまでの直弼の全生涯を振り返りながら、「井伊直弼」という人物の素顔に迫り、新たな直弼像を彦根の地から発信する。

⁴⁸⁾2008年6月29日にびわ湖放送で「特別番組/開国150年/彦根・横浜 未来への思い」が放映された。2007年度の彦根城築城400年祭と同じくここでも横浜を重要な不可欠のパートナーとみている。

2.文化人としての直弼に光を当て、文化的な人間像と直弼につながる彦根文化を次世代に継承する。

3.国宝・彦根城築城400年祭で培われた、市民の高い参加意識と実行力を糧としながら、引き続き新たな彦根の文化・魅力を創造する契機とする。

4.開国、開港を軸にゆかりの地域や人の連携、交流を深めると同時に、開国から今日までの150年を振り返る。

と示されている。「井伊直弼と開国150年祭」(以下、150年祭、とする)は、おそくとも2008年1月には、その会期を2008年6月から2010年3月までの長期間とすること、開幕の2008年は日米修好通商条約締結から、閉幕の2010年は直弼没後からそれぞれ150年を記念するときと設定し、「開国を決断した文化人としての新たな直弼像を発信するのが狙い」と公表されていた(『読売』1.12朝刊)⁴⁹⁾。当初は6月7日を150年祭開幕の日として、その日に式典を挙行する予定だったが、直弼が大老に就任した日をとって6月4日に変更したという(『中日』滋賀総合、5.13朝刊)。週末の7日土曜日ではなく、直弼が大老に就任した太陰太陽暦の安政5年4月23日を太陽暦に換算した6月4日に開幕記念式典を挙行することとした理由は、「就任の節目にやるべきだ」という意見が強かったからだという(『朝日』滋賀全県、5.14朝刊)。150年祭の「スケジュール正式決定」を伝える記事は(『産経』滋賀、5.13朝刊)、実行委員長の「これまでの“悪役”イメージから脱却し、開国を決断した果敢な政治家であり、教養豊かな文化人でもあった直弼像を、正しく理解してもらえるよう発信したい」との談を載せ、また記者による「安政の大獄の責任者としてマイナスイメージの強い直弼の人間像を再評価する目的もある」との受けとめ方も示されている。

150年祭開幕まえの特集記事としては、『中日』(5.29夕刊)がもっとも大きな紙面をそれにあてている。「井伊直弼と開国150年祭/ことしも彦根が熱い」「開国の英断/日本を救う」「地元民から愛される直弼」の大きな見出し、「彦根市民から深く愛される井伊直弼像」「築城四〇一年めを迎えた国宝・彦根城」「井伊直弼が不遇な青年時代を過ごしたお城の一角にある埋木舎」のキャプションとそれぞれの写真にくわえ、着ぐるみひこにゃんの写真が添えられて、150年祭のガイドと祭典の根拠となる歴史が示されている。

祭典がおこなわれている現時から150年まえの1858年は、「日本は歴史的な瞬間を迎えた」とき、だという。その「歴史的な瞬間」とは、「日米修好通商条約を締結し、二百年以上続いた鎖国を解いた」ことである。鎖国の解除、すなわち「開国」の「決断を下した」のが直弼だというのだ。前出の「開国の英断/日本を救う」の見出しの上下に、直弼の紹介が書かれる。11代藩主の14男に生まれる、部屋住み、埋木舎での「不遇の青年期」、和歌や茶など「文武両道」、13代藩主、そして幕府の大老となる、と型どおりの略歴がならべられたうえで、直弼は「開国こそ日本の生きる道」と、天皇の勅許を得ずに日米修好通商条約を締結した」と彼の功績が示される。だが、安政の大獄という「弾圧」をおこない、それへの「反発」として桜田門外で暗殺される、とこれまた型どおりの末期があげられる。

こうした型どおりの直弼の歴史は、型どおりのイメージをもたれてしまう、となるのではないか。記者自身も、「悪いイメージで語られることが多い直弼」というのだから。しかし、「地元の彦根では開国の英断を下して日本を救った政治家として、また茶の湯などを愛した優れた文化人として慕われている」と流通するイメージと地元の直弼像との違いがあげたてられる(その文章のすぐ左には、「地元民から愛される直

⁴⁹⁾以下、150年祭関係記事は、滋賀県立図書館の「滋賀県関係新聞記事見出し検索」を用いた。2008年の記事を表示するときは月日のみとする。

弼」との見出しがある)。直弼のイメージが主題となれば、150年祭の事業として「直弼像に迫るリレー講座」も企画される。2008年6月28日から2009年2月まで彦根市内で、「直弼考 リレー講座&直弼とその時代の肖像画展」が開かれる予定という。そこでは、「さまざまな評価がある直弼。専門家たちの講演によって、“真の直弼像”に迫る」企画である。いま改めて、「直弼」が見つけ出されようとしているのだ。

とはいえ、直弼の「素顔」や「文化人としての直弼」の発信も、また「真の直弼像」「新たな直弼像」を「正しく理解」しようという呼号も、どれも本稿でみてきたとおり、これまでも彦根でのなにかの記念にさいしてくりかえし提示された直弼への向きあい方である。直弼没後百年、大老開国百年祭からも半世紀ちかくが経ったところで、直弼像がどのようにあらわされているのか、それをめぐる理解の「正し」とは、だが、どのように判定できるのか、そして、直弼を考えたり再評価したりすることは、いったいなにを考えることとなるのか、を熟考する機会がこの2008年～2010年のはずなのだ。それは専門家の仕事であって、客寄せにはひこにゃんがあればよい(だから天秤櫓でひこにゃん展をやっている)というのであれば、それはそれで明快でよいかもしれない。

さて、150年祭事業の一環として、彦根城博物館で「シリーズ「直弼発見！」」巻の1「井伊直弼 大老への道のり」が、「ゆかりの品々や自筆の手紙。生い立ちから大老就任にいたるまでの軌跡」をあらわす展示として開催された⁵⁰⁾。同館ではこのシリーズが巻の6まで予定されている。

巻の2「開国の時代と彦根藩」(7月26日～9月1日)「西洋の文物を学んで軍事変革を遂げ、黒船渡来に対応した彦根藩」

巻の3「井伊直弼の茶の湯 - 一派創立と茶会記」(10月2日～10月28日)「著作や茶会記、茶会で使った道具。大名茶人として茶の湯と真摯に向き合った姿」

巻の4「井伊直弼の家族」(10月31日～12月1日)「どのような家族とともに暮らしたのか。その家庭環境と、妻子への思い」

巻の5「弥千代の雛と婚礼調度」(2009年2月6日～3月10日)「二女弥千代の雛道具と、高松・松平家に嫁いだ際の婚礼調度」

巻の6「井伊直弼の甲冑と刀剣」(2009年3月13日～4月14日)「藩主就任に際して新調した甲冑と指料や、居合の鍛錬に用いた刀」

これらとはべつに「特集コーナー 直弼のこころ」(2008年5月21日～)も設けられ、そこでは「国政を担う政治家として知られる一方、茶の湯や国学、禅、居合などに真摯に取り組む、文化人の面を併せもつていた直弼の「ゆかりの作品を集め、その人となりを紹介」するコーナーもある。

この「シリーズ「直弼発見！」」の巻の1として企画された展示の解説シートでは、

本年は、彦根藩13代藩主井伊直弼が江戸幕府大老となり、日米修好通商条約を締結した安政5(1858)年から、ちょうど150年にあたります。彦根市では、この機会に、日本の開国に大きな役割を果たした井伊直弼の人物像を全国に発信する「井伊直弼と開国150年祭」を開催します。

との案内がおこなわれている。この巻の1「井伊直弼 大老への道のり」は、「直弼の生い立ちから幕府大老に就任するまでの軌跡」をたどると紹介されているのだから、日米修好通商条約調印は展示対象となっ

⁵⁰⁾ 『彦根城博物館年間スケジュール/2008.4～2009.3』(彦根城博物館)のリーフレット。彦根城内の天秤櫓では「ひこにゃん」展が始まった(『毎日』6.5朝刊)。記事の見出しは「「ひこにゃん」も一役」。

ていない。6つのシリーズは直弼の生涯を年代の順にみせる構成になっているわけではないので、これでは、巻の1が日米修好通商条約が調印された日である6月19日を開催期間に含む展示であるにもかかわらず、ここでは、直弼がどのように「日本の開国に大きな役割を果たした」のか、また、記念事業の本源にたちかえって、なぜ日米修好通商条約調印を「開国」といっているのかを知ることができない。

かつて開国百年を記念しておこなわれた、開国百年記念井伊大老展（朝日新聞社主催、1953年10月20日～25日、東京日本橋三越）と開国百年記念歴史展（横浜市ほか主催、1954年5月27日～6月3日、横浜伊勢佐木町松屋）の2つの展示では、直弼の最初の開国意見として「別段存寄書下案」（嘉永6年8月）が披露されていた。今回それはなく、ここでは嘉永7年（1854）11月の「井伊直弼攘夷祈願祝詞」が展示されている。これでは、展示の根本テーマだった「開国」との関連が、うまくつかめなくなるのではないか。また、テーマ展会場にあった関連年表は、文化12年（1815）10月の生誕に始まり、没後として文久2年（1862）11月の事項までが記されている。関連年表の末尾は、「幕府より直弼政治が非難され藩領のうち10万石減知の処罰を受ける」となっている。開国150年を記念した事業の1つとなるテーマ展であるのなら、このシリーズのなかのどこかで、直弼とこの150年を関連させてみせる展示を期待したのだが、予告されているかぎりでは、それもなさそうに見える。

本稿でみた範囲では、直弼の顕彰は「開国」を軸におこなわれてきた。日米修好通商条約（あるいは安政5か国条約）締結150年を数える2008年には、「開国」という出来事に直弼をかかわらせたり、直弼の事績として「開国」をとらえたりする度合いが弱まっているように見える。直弼の郷里彦根においてさえ、2008年を開国150年ととらえながらも、その「開国」をめぐる問いを十分に解いてゆこうとする姿勢がいまのところみえず、内実のない空虚な「開国」が標示されているていどではないか。

おわりにかえて

論点を示す

空虚な「開国」 わたしはこうした事態の一端を理解できるような気がする。こうした事態の淵源は、直弼の顕彰の仕方それ自体にあったのではないか。本稿の最後に論点として、それを示すとす。

さきにも『朝日』連載の「井伊大老／開国百年祭に寄せて」は、たんなる直弼伝にとどまらず、第14回（10.12）とつぎの最終回（10.13）を直弼の顕彰のされ方の報道にあてていた。それはべつにいえば、直弼の歴史の記され方、本稿の観点でいえば、直弼への歴史の捧げ方となる。同連載は、戦前から戦後への転換は「敗戦 - 占領 - サンフランシスコ講和」という展開であり、それは「これまでの“皇国史観”では想像もつかない異常な出来事の経験」であったととらえる。直弼をめぐる「国賊の汚名」を払拭させた原動力は、この経験にあったという。戦前にはもう1つ、勝利した官軍の立場からの明治維新史観があり、それによっても直弼は「賊」でしかなかった。それがさきの時代の転換に支えられて、「井伊家文書という資料の上に打ち立てられた“彦根史学”」が登壇して、直弼を「日本に欧米文化の花を導き入れた進歩主義者であり、日本人の実力をあくまで信じた民族主義者だった」と新しい像に改めたというのだ。

記事はもう1つ、「人民の側から」歴史をみる「戦後の新説」の登場を取りあげる。この観点からしても、

直弼は「反動」となる⁵¹⁾。「終戦直後の大老観はこんなにきびしくなかった」と、記者は嘆く。それというのも、日本の敗戦を幕末の尊王攘夷の「敗北」の帰結とすれば、ともかく条約調印を遂行した直弼に「同情」が寄せられたとみるからである。記者の口吻は、人民の側からの歴史などを説くものたちは敗戦の苦衷を忘れたのか、というようである。いまやこの人民の立場からの直弼反動政権論にどう対処するかが、「彦根史学」に問われているとなるのだろう。

ここでは、人民の立場からの直弼論はおくとして、開国進取を国是とした新政府のもとでの維新史観や、20世紀中葉の敗戦を19世紀後半の尊王攘夷につなぐ歴史意識における直弼像を考えるためにも、これまでの本稿の議論をまとめなおしてみよう。

さきの『朝日』連載はその第9回(10.6)で、倒幕を果たした明治政府の対外方針は「井伊路線」ではないかと記していた。こうした疑義や不思議な気分は、憤慨のひとつ手前にまで至るばあいがある。前掲矢部『開国の偉人 井伊直弼』は、直弼政治の正当性をその後の展開にもとめていた。日本は20世紀初頭には「世界の一等国」となった、その発展の歴史の端緒を開いたのが直弼ではないか、と矢部は主張していた(同時にこれによって直弼襲撃勢の非を唱える)。考察途上での想像が許されれば、維新の元勳、明治の元老たちがなぜあれほど直弼を嫌ったのか。それも、彼らがみずからの政治の始まりを過去に溯ってたどったとき、そこに直弼がいてしまう、直弼がいたとき、自分たちは攘夷に奔走していた、そのことをみせつけられてしまうからだ、とみれば理解できるかもしれない。彼らにとって、いわば、「開国」が鬱屈してあったのではないか。

そして、「開国」をめぐる歴史記述の不安定さは、すでにみたとおり、高校日本史教科書においても散見された。歴史の発展や進歩という観点を明言しないまでも、どうしても通史という歴史記述の型は、出来事の展開をつぎに進むように記してしまう。江戸時代の終焉を必然とする近代の立場や観点からは、桜田門外の変が幕府崩壊の1つのきっかけととらえられる。この事件を鎖国維持、攘夷運動の一環とすれば、安政の大獄とそれを主動した直弼は、「開国」の推進者となる。「開国」をよりいっそう進めようとしたのだが、しかし、直弼は桜田門外で暗殺されてしまった、と教科書が歴史を記録したのである。そのちに記される歴史の展開は、維新、帝国、膨張、一等国、敗戦、そして「第二の開国」⁵²⁾などとあらわされる戦後、となる。

直弼の評価が定まらないとくりかえし指摘される事態は、わたしたちの歴史の始まりにおかれてしまう「開国」をとらえるときの不安定さと連動しているのではないか。修好通商条約締結から150年を経た現在、わたしたちが「開国」を考えることに倦んでしまってはならない。直弼に「開国」の歴史を捧げてきたものが、こんどはその献上品の意味を考えたときなのだ。

51) この連載は幕末の老中や藩主を戦後の現在(連載執筆当時)の政治家にあてはめてあらかず喩えを用いる。この戦後の新説では直弼が岸信介、幕末尊王志士は全学連と喩える。一見わかりやすそうな喩えは表現の枯渇と考えるが、この喩えは記事執筆者の新説への反感や直弼評価への躊躇があらわれていておもしろい。

52) 「第二の」という表現はありふれるほどに好まれていて、そこになにか重要な意味などないのかもしれない。現在横浜市役所まえに「2009年6月2日(火)/横浜は開港150年を迎えます」と標示されているカウントダウン・ボードには「「第二の開港」へ」と大書されているが、もちろんその意味はわからない。